



# 我傍に立つ【実名版】 2



第一章 里の生活2  
第二章 出会い1-3

吉野 圭





# 目次

第一章 里の生活	
二 . . . . .	3
第二章 出会い	
一 . . . . .	11
二 . . . . .	20
三 . . . . .	27
注釈	
. . . . .	37
解説	
解説を付けることについて . . . . .	43
史実の曹操ってどんな人だった? . . . . .	44
陳寿の嘘? 管仲・楽毅と『梁父吟』 . . . . .	57
劉備と諸葛亮が初めて会ったのは、樊城か新野か? . . . . .	62



## 第一章 里の生活



隆<sup>りゅうちゅう</sup>中は雨の多い土地だったと記憶している。

草木生い茂る初夏、霧雨に濡れた隆中を歩けば濃い緑の水底を泳いでいるかのような錯覚に陥った。

水が豊かな土地ゆえ、小さな湖や泉がそこかしこにあった。散歩の途中、森の中で見つけた気に入りの湖があり、畑仕事のない季節にはその静かな湖で一人小舟を浮かべ過ごしたものだだった。

雨の降る日には畑仕事も散歩もできない。朝から晩まで家に籠もり書物を読んでいても気が咎めることがない。絶好の読書日和だ。里の人々が「気が滅入る」と言う長雨の季節も、私には言い訳せず書物へ潜り込める幸福な読書期間となった。

「少爺<sup>ぼっちゃん</sup>は、勤勉な人だねえ。雨で暇ができれば読書で、お勉強かい。きっと偉い学者先生になるんだろうね」

里の人々が通りすがりに私を窓から覗いて見ると、必ず笑顔で声をかけていく。その声には感心したような、少し呆れたような響きがある。いつも同じ壁に寄りかかる姿勢で読書していたからだ。

私は何と答えれば良いか分からず曖昧に苦笑を返す。“勤勉”のためだけに書物に向かっていたわけではない。何より書物が好きだった。文字を見つめている時は心が安らぐ。

世界を知りたいという願望はあった。そのために一冊の書を暗唱できるまで繰り返し読むのではなく、古今東西の諸子百家、分野学派にこだわらず手当たり次第に読んだ。伯父の遺産として唯一もらい受けた書庫の書物を読み尽くした後は、学友たちからも借りて読み漁っていた。漢代ではめずらしい“乱読家”であったらしい。

襄陽<sup>じょうよう</sup>にいた頃は水鏡<sup>すいきょう</sup>と呼ばれた著名な学者、司馬徽<sup>しばき</sup>先生に師事して学んでいた。

水鏡先生のもとでも私の乱読姿勢は同じだった。当時は儒家なり道家なり、専門分野を定めて突き詰めることが学問の常道だったから、分野を定めない私の読書姿勢は褒められたものではなかった。

一度読んだ書物を滅多に読み返さず、次から次へと読み捨てていく私を学友たちは「お前は何か<sup>か</sup>になるつもりなのか。儒家<sup>じゅうか</sup>か道家<sup>どうか</sup>か、法家<sup>ほうか</sup>か。それとも兵家<sup>へいか</sup>か」

とからかった。私は嫌味に取り合わず、  
「何家にもなるつもりはないよ。あるいはその全てになるのかもしれない」

などと答えてあしらっていた。すると学友たちは発言の後半だけ切り取り「諸葛は百家全てになると大言壮語を吐いた！」と騒いだのだが、否定するのも面倒だから放っておいた。〔※3〕

学友たちは書物を精読し、一字一句漏らさず暗記することに心血を注いでいるようだった。何故そこまで細部の言葉にこだわり暗記だけに力を注ぐのか私には理解できない。暗記の学業をすれば他人の言葉を口から出す複製人形になるだけだ。それより理解することに力を注げば良いのに、と思っていた。

物事には何でも“本筋”がある。高い塔を中心に支える太い柱のようなものだ。学問では論の構造を読み解き、中心の柱を見抜けばその分野を理解し会得できる。さらに広く他の分野を眺めれば、共通の本筋があることに気付けるだろう。いずれ世界の中心を貫く柱を観ることができる。世界の本質を捉えてから細部を暗記しても遅くはない。

しかしこのような学び方を説明しても誰にも理解されないのだった。ほとんどの人が、知識と理解の区別がつかない。知識さえ身に着ければ偉い学者と崇められ出世できると考えている。

ある時、私は重箱の隅を突くような書物の暗記に苦しんでいる友人たちを慰めるために

「君たちはそれだけ学業に励んでいるのだから、仕官すれば州刺史ししか郡太守たいしゅくらいには出世できるはずだよ」

と言った。自分にはできない努力をしている友人たちへの尊敬も込めていた。しかしそれが彼らの気持ちを逆撫でする言葉だったことには後から気付いた。

その場にいたのは石広元せきこうげん（石韜）・徐元直じょげんちよく（徐福。一般には徐庶しよ）・孟公威もうこうい（孟建）の三人だった〔※4〕。日ごろ仲良く交流していた三人で、“変わり者”で通っていた私の性格も認めてくれる友人たちだったのだが、この時はさすがに顔色を変えた。

義侠心の強い元直は齒に衣着せぬ物言いをする人で、しばしば私の世間知らずを戒めてくれた。この時も叱るように切り返した。

「それでは、君は。自分はどこまで出世するつもりだ」

三人とも食い入るような眼で私を見つめ答えを待っていた。余裕のある人間から馬鹿にされた怒り、それに本気の興味が混ざった眼だった。

“誤解だ。馬鹿にしたつもりはない”

という意味を含めて私は首を横に振り笑った。

出世についても本心を口にすればさらに怒りを買うことが分かっていたから答えなかった。「私は出世するつもりはない。真実の道を求め、在野の思想家として暮らしていく」とは、その場で言える雰囲気ではなかった。

もっとも「出世するつもりはない」とは常日頃から口にしていた人生計画だった。それなのに誰も信じてくれず競争相手と定めた私の腹を探ってくるのだった。

口にすれば怒られるが、私は人の競争心がわずらわしい。

誰もが自分の道だけ見つめて歩めば競争に焦ることもなく、嫉妬心で人の足を引っ張る必要もなくなるだろうに思う。しかし競争は人の本能。健康な人には他者と競り合



わずに生きることは難しいのだろうか？

やはり友人らが言う通り私は変わり者なのか、生まれつき競争本能が弱いようだ。ただ自分の道を目指したいだけ、他人と競う気はないのだから放っておいて欲しいと願う。ところが競争に無関心でいると逆に「余裕がある」と誤解されるらしく、かえって他人から競争心を浴びることになるらしい。

襄陽でも学友からの競争心を浴びてわずらわしくなり、水鏡先生のもとから自然と足が遠のいた。襄陽を去り隆中に籠ってからは久しく師を訪ねてもいなかった。

時折、襄陽から学友たちが訪ねて来た。しかし情勢が逼迫し、曹操の躑が荊州でも聴こえる頃になると学友たちの来訪も間遠くなった。

孟公威が最後に隆中を訪れたときは暗い顔をしていた。彼は私の家の周囲を彩る紅葉を見まわし、

「今年も君の庵は美しいな。去年と同じ紅葉が見られるとはありがたい。ここの平穏な風景は、もはや夢のようだ」

と言った。いつになく感傷的な言葉に私は彼が何を告げに来たのか察した。黙って待っていると、ぼつり公威が呟いた。

「故郷の汝南へ帰る。…曹操へ仕えようと思う」

「曹操へ！ 何故だ」

分かり切っていた告白だったが、友の辛い選択が私には耐えがたかった。だからわずかな望みにかけて説得しようとした。

「独裁者に身を売るなど愚かなことだ。今、道義心がなく出世欲の強い者ばかりが曹操のもとへ集まっている。しかし私欲で独裁者に仕える人々は、火を目指す羽虫のようなもの。いずれ自分の欲に焼かれることになる。現に曹操はたくさんの人材を使い捨てにしている。君の才能も埋もれ使い捨てにされるだろう」

しかし公威は弱く笑い、分かっていると頷くだけだった。

「母のためだ。故郷に残してきた母は人質にとられたのと同じ。私が曹操へ仕えねば母は生きてはいられまい」

「しかし……外に居ればいずれ出世して母御を呼び寄せる道もあるはず。君が志を果たす場所は、何も中<sup>ちゅうげん</sup>原だけとは限らないだろうに」

なおも説得を続けたようとしたが、彼は他に選ぶ道はないと諦めている様子だ。

以前は何かと私に相談をし将来の指導を求めてきた公威も、この時ばかりは頑なだった。私は涙と言葉を呑み込み彼の手を取った。

「分かった。君の健闘を願う。生きていてくれ。再び言葉を交わせる日が来るように」

時は移ろい行く。

いつの間にか隆中へ住み始めてから六年が過ぎようとしていた。

親族は私の里での棲み処を突き止め、「襄陽へ戻り仕官するように」と様々な立場の人を差し向けて説得を続けていた。

「私ももう二十五歳を過ぎた。いい加減に、一生仕官しないものと諦めてくれないか」

他人事のように呟きながら再びの引っ越しを考えていた頃、舅である黄承彦<sup>こうしょうげん</sup>が我が家を訪ねて来た。

黄承彦の強い求めに応じ、形ばかりの婚儀で夫婦となった妻はまだ子供だった。黄氏が娘を車に乗せ隆中へ送り届けて来たのだが、隆中のあばら家は少女が育つには酷な環境だったためすぐ親元へ返していた。婚姻の籍はそのままである。

「本日訪れたのは他にもない。君の将来のことだが」

舅は狭い客間へ上がるなり世間話もせず切り出した。

「君が劉表<sup>りゅうひょう</sup>（荊州牧）のもとへ仕官しない理由は理解している。劉表では自分の能力を活かす主人として不足だと考えているのだろうか？」

いえ、そういうわけでは……と否定したのだが舅の耳には届かなかった。誰のもとにも仕官するつもりはないと告げているはずなのだが、舅も私の親族と同じく納得していない。

「しかしだ、隠棲したまま生を終えるつもりはないはず。私も君の評判の高さを信じ、将来出世すると見込んで娘を嫁に出したのだぞ。隠棲老人と結婚させたつもりはない」

水鏡先生や徐元直たちが“見込みのある青年”として、あちこちで私の名を出していたらしい〔※5〕。黄氏はその評判にかけて娘を嫁がせたのだそうだが、妻には迷惑な話だ。どうして「仕官するつもりはない」という私の人生計画を誰も信じてくれないのか？

もはや抗議の声すら出ない。ため息をつき黙っていると舅は本題であるらしい話を始めた。

「新野<sup>しんや</sup>にいる劉備<sup>りゅうび</sup>を知っているだろう。彼が今、樊城<sup>はんじょう</sup>で食客<sup>しょつかく</sup>〔※6〕を募っているそうだ。面会に行ってみてはどうか」

劉備。もちろん知っていた。当世、劉備の名を知らぬ者はいない。曹操に抗ったことで中華全土を熱狂させた英雄だった。しかも皇室の血統に連なる人物で人徳も高いと聞く。劉備が統治していた徐州では仁政を敷いたため民の評判も良い。曹操に敗北して以降の人気は衰えていたものの、劉備に乱世収束の望みをかけている人はまだ多かった。

だが私は著名人や英雄に興味がなかった。遠方の伝説など私は信じない。現代の著名人で私欲のない者などいるものか、とも思う。そもそも出仕するつもりのない自分には、いかなる英雄であろうと無縁だと考えていた。

「せっかくのお話ですが」

断りかけた私を制して舅は告げた。

「いいか、これは最後の機会だ。食客希望の面会すら行かないなら娘と離縁させる他ない」

「えっ……離縁、ですか」

意外な脅迫に息を飲んだ。

離縁。そのほうが妻は幸福になれるだろうと考えたのだが、離縁で彼女の将来に傷がつくことを思うと胸が痛んだ。当時、女性の人生で離縁は重大事だった。まだ幼いのに、親の勝手な思惑と不肖な夫のせいで人生に傷を付けられるとはあまりに酷い話ではないか。離縁するとしてもそれは彼女が大人になってから、彼女の意志で決めることだ。

「一度でいいからやる気を見せたまえ。劉備のもとへ行き、出仕に至らないならそれまでの男と諦める。才のある君が何もせず籠っていることが残念でならんのだ」

断固とした舅の態度に私も腹を決めた。

「……分かりました。お義父様の仰せに従い、一度だけ樊城へ行きます。私には誰かに仕える気がないので現状は変わりませんが、お約束を果たすのですから、今後二度と私の人生に口出しすることがないようお願いします」

舅に対して失礼な物言いだったと思う。それでも舅は前半だけ聞いて喜び、顔をほころばせた。



## 第二章 出会い



一

建物に入ると視界が暗くなり、ひんやりとした空気が身を包んだ。陽に照らされた大通りを歩いて汗ばんだ肌にはその清浄な冷気が心地良かった。

目が日陰の暗さに慣れるまでしばらく入口に佇んでいた。高く薄暗い天井に人々の談笑が反響していた。想像外に多くの人々が集まっているようだ。気後れしたが歩き出す。太い柱と人々の間を縫うようにして奥へ進んだ。暗い階段に突き当たり、どちらへ行けば良いか分からず引き返そうとした時、案内人に呼び止められ広間へ連れて行かれた。

広間にはすでに多くの食客希望者が集まっていた。あちらこちらで人の輪ができて談笑が始まっている。大げさに挨拶する人々や笑い合っている人々の傍らを通ると、耳に入るのはどこかで聞いたことのある名ばかりだった。

この場には荊州の名士〔※7〕が一堂に会していたのだ。広間にいた人々の年齢はだいたい四十代から五十代で、皆貫禄かんろくがあった。私と同じくらいの年齢の若者も何人かいたが、彼らは皆、有名な父親に伴われて来ていた。しかも彼らは金糸で刺繍を施した錦を纏い、態度も堂々としていて自信に満ちていた。比べて私は有名な父親の同伴もなければ、単色で刺繍のない布衣ほい〔※8〕を着たみすぼらしい若者であった。このため私はこの場ではひどく浮いて見えた。人々は皆、口には出さないものの「どうしてこんな場違いな若者が紛れ込んできたんだ？」と不審の目で私を見ていた。

食客は通常、身分の低い浪人などが衣食を求めて志願するもの。しかし劉備に召し抱えられたいと望む者は多いようだった。何とか劉備と面会し自分を売り込もうと、このような機会があれば真っ先に有力者たちが詰めかけていたらしい。従ってここでは衣食に困る浪人など一人も見かけなかった。本物の浪人が訪れても煌びやかな会場を見れば場違いを悟って帰っただろう。だから会場の中で最も若くみすぼらしいのが私だったというわけだ。

私はいたたまれなくなり広間の隅の壁際に隠れるようにして立った。  
“やはり来るべきではなかった。今後はどれほど頼み込まれても脅されても来るものか”

心の中で繰り返していたが、舅との約束を果たすために来たのだから逃げることはできない。私は時が早く過ぎることを祈っていた。

人々の談笑が止んだ。この城で最も高位の人物——樊城はんじょうに滞在する劉備はんじょう——が広間へ入ってきたのである。彼の姿を見て人々は緊張した面持ちとなり、広間の前方へ移動して座った。私は自然と端へ追いやられ城主から最も遠い場所に座ることになった。

食客希望者本人とその父親たちは皆、姓名を書いた名刺〔※9〕を持参して座の傍らに置いていた。おそらく城主が気に入った者に後日声がけできるよう、名刺を持参する

のが暗黙の約束事であつたらしい。そのような約束事があつたとは知らず私は名刺を持参していなかった。名刺すら出さない私をまた周囲の人々が不審げに見ていたが、もともと出仕するつもりもなく来たのだから問題ないだろう。

城主は全員が座つたのを見ると、軽くひとこと挨拶して中央の壇上に座つた。それを合図に面談が始まつた。

面談とは自由な論戦形式の集団面接だつた。意見のある者が姓名を名乗って立ち上がり、自分の考えを披露する。時にはその意見に反対意見が出て白熱した議論が展開されることもあつた。城主はそれらの意見を聞き、能力を較べて判断し、気に入った人物がいれば食客または家臣として迎え入れるらしい。このため議論が起こつた際には自分の力の見せどころとばかりに、多くの人が議論に参戦して相手を言い負かすなどしていた。同年代の若者たちも次々と立ち上がり堂々たる意見を述べていたため私は感心していた。

私自身は議論に興味はなかつたし、このような場で発表するほどのご大層な意見も持ち合わせていなかった。言うまでもないことだが、私のようなこの誰とも分からない庶民風情の若者に意見を求める者もいなかった。このため私は面談の間中ひとことも声を発することなく場を眺めていた。

最初のうちは他人の発言に感心したり尊敬したりしながら会場を眺めていた私だつたが、すぐに退屈を覚えた。欠伸を噛み殺すことに疲れ果てた頃、とうとう私は人物観察を始めた。たとえば「あの人は怠惰な生活が滲み出た体をしているわりに偉そうなことを言うなあ」とか「あの人は善良そうに見えるが裏では相当に汚いことをやっつていそうだな」などと。

しかしそうして暇を潰しているうち私は気が付いた。この場にいる人々は皆が素晴らしく立派な意見を述べるけれども、どこかで聞いたような言葉を繋ぎ合わせているだけに過ぎない、ということに。つまり立ち上がつて意見を述べている者の中には本当に自分の考えを持っていて、自分の言葉で話すことができる人間など一人もいなかったのである。皆、情報の収集力だけは優れているが自分の頭で物を考えることができないのだ。そのわりに見かけだけは偉そうである。自分が一番立派だという顔をして、ふんぞり返っている。いったいこの偉そうな木偶の衆を見て、本当に偉い立場にある城主はどう感じているのだろうか。

私はそう思って、城主へ目を移した。

実は私が城主をまともに見たのはこの時が初めてだつた。英雄や高位の人物に全く興味がなかつた私は、この時になるまで城主をきちんと見ていなかったのである。

ここでようやくゆっくりと“あの人が有名な劉備という人物なのか”という意識で城主を眺めた。

劉備は当世最も人気を得ていた人物で、十年も前から英雄の一人に数えられていた。かつて徐州牧だつた陶謙に篤く信頼され牧を譲位されており、朝廷からは左將軍・宜城亭侯・豫州牧に封じられた。目下漢王朝を専横している虐殺魔、曹操に反旗を翻したことで全土の人気を集め一躍英雄となつた。家格も由緒正しく景帝〔※ 10〕の末裔に当たるとか、今上〔※ 11〕が御自ら系譜を調べられ確かにその通りだと仰せられたた



め、以降世間では劉皇叔〔※12〕と呼ばれ敬愛されていた。

庶民から見れば紛うことなき雲上の人だった。私が隆中の人々に「この目で劉備を見た」と告げれば、彼らは興奮して卒倒してしまうかもしれない。

しかし現実はこの目で見た劉備は世間で騒がれている偉人のようにはとても思えなかった。彼はたいして大柄なほうではなかった。年齢はこの場にいる偉そうな名士たちと変わらないはずだったが、見た目には三十代半ばかと思えるほど若々しかった。そのぶん貫禄には欠けていた。親しみのある人なつこい顔に、気さくな笑みを浮かべたその様子は「中華で十本の指に入る英雄」と言うよりむしろ「近所のお兄さん」と呼ぶほうがふさわしいように思えた。この室内で最も高位の彼が、一番偉くないようだった。

いったい、あれだけ有名で高い地位にありながら、少しも偉そうな態度を取ることがないあの人はどういう人なのだろう？ 私はそう思った時から城主に興味を持ち、しばらく眺めていた。

だがそうして城主を眺めていた時だった。

私はあることに気付いた。そしてその瞬間に背筋が凍るような感じたのだ。

——瞳が、真剣だ！

城主は驚くほど真剣な目をしていたのである。その気さくな笑顔とは裏腹に、瞳にはぞっとするほどの冷たい光が宿り、発言をしている相手の姿を捕らえて放さなかった。

さらに私は城主が、相手の話を聞いていないことを知って驚いた。彼は言葉など全く耳に入れず、ただ意見を言う人の目をじっと見つめているだけなのだった。

この瞬間私は城主に畏怖を覚えると同時に、奇妙な共感を覚えた。不思議なことだが、今この室内で城主と自分が全く共通の考えで結ばれている気がしたのだ。まるで、このどうしようもない人々の集まる空間の中で、あの人と自分だけが同じ種類の存在であるようだった。

馬鹿馬鹿しい空想かもしれない。相手はこの室内で最も高い立場にある人物、対して私は室内で最も低い立場の人間なのだ。それなのに彼と自分が共通の考えを持っているなどと勝手に思うのは、図々しいにも程があるだろう。だが本当にそうってしまったのだから仕方がない。

何故だかよく分からないが、私は“あの人と自分は全く同じ気持ちによって、この広い地上で結ばれている”と強く感じたのである。

ふと気付くと面談は終わっていた。人々は席を立ち、出口へ向かって列をなしている。

いけない、自分は何をやっているのだろうと思った。あれだけ早く帰りたいと願っていたのに、最も後に出て行くことになるとは。

私は慌てて立ち上がった。その瞬間、城主が私へ視線を向けた。そして必然的に私は城主と目が合った。

それはほんの刹那<sup>せつな</sup>のこと。その刹那で私は城主の目の中に、何か驚きのようなものを見た気がした。

私は不思議に感じた。城主が私を見た時の微かな驚きの表情が、まるで知り合いに会った時のものに似ていたからである。

まさかそんなはずはないと思いながら、もう一度城主に目を向けた。すると城主も再びこちらへ目を向けた。その瞳からはもう先ほどの驚きは消えていたが、彼も何故だか不思議そうな顔で私を見ていた。

私はその城主の様子を見ているうち、非常に強い直感が湧いてくるのを感じていた。それはあの人物が、間違いなく自分と共通の何かを持っているという直感だった。そして私はその直後、さらにはっきりと確信したのだ。

“自分はその人と、話をすることができる”と。

この時の直感を説明することは難しい。とにかく私はあの人と、話を交わすことができると感じていた。そしてその直感がもし本当であれば、自分は今ここであの人と話を交わさなければ必ず後悔すると思った。何故なら自分があのような人物と会うことができるのは、一生に一度、今日この時しかないと思っていたからである。

私はまるで何かに操られるように、再びすんと腰を下ろした。そして私以外の出仕希望者が全員名刺を置いて出て行った後も、その場に座り続けていた。

広間の隅に立っていた城主の家臣たちは、いつまでも居残っている私のことを不審人物とみなして警戒を始めたようだった。よく考えれば私は刺客（暗殺者）と思われても仕方のない行動を取っていたのである。しかしそのように疑われても広間を出て行くことができなかった。

この時、私の心臓は早鐘のように鳴っていた。家臣たちの警戒の視線が痛いほど身に突き刺さり、手や背中汗で濡れた。そもそも城主に話しかけようにも、いったいいつ、どんなきっかけで話しかければ良いのか見当もつかない。もうこんな分不相応な挑戦はあきらめて、今すぐ立って広間を出て行こうと何度も思ったのだが、立とうとすると身体が震え出して立つことができないのだ。

緊張が耐えられる限界まで膨れた時のことだ。ふと私は違和感のあるものが目の端に映ったという気がした。顔を上げて見ると、それは城主の姿だった。

城主は、家臣たちの警戒と私の緊張とで張り詰めた空気が充満するこの広間で、一人落ち着いていた。何食わぬ顔で肘掛にもたれ悠々とくつろいでいたのである。

私はあまりの緊張のせいでそれまで気付かなかったが、考えてみれば城主の行動も不自然なものだった。不審な若者が居残り、家臣たちが若者を警戒して睨みをきかせているその前で、まるで自室にいるかのようにくつろいでいる。

私はここでようやく悟った。明らかに、あの人は私が話しかける時を待っている。

たまに、ちらちらと顔を上げ、私を眺めるのがその証拠だ。わざとらしいその態度は、まるで父親が子供が話しかけてくる時を待っているかのようだ……。

このことに気付いた時、私は緊張が解けていくのを感じた。そして城主が手の中に持っている何かを見ているうちに、自分でも知らないうちに立ち上がっていた。家臣たちが一斉に構え、腰に提げた剣の柄へ手をやった。かちやりと剣が抜かれる音も聴いたが、かまわず歩き続けた。

「それはいったい、何をなさっているのですか？」

私が突然話しかけたので、さすがに城主は驚いた表情をした。そして手の中の物をぼん、と前へ投げ出し言った。

「見て、分からないか？」

私は手芸に疎いのとすっかり舞い上がってしまっているのとで、それを目にして何であるのかよく分からなかった。

「申し訳ありません。私は手芸に疎いもので、よく分かりません」

正直に言うと城主は少し眉を上げ笑った。近くで見た彼の瞳は二重で丸く、子供のよように澄んでいて、室内の光を映して輝きを浮かべた瞳が楽し気に細められる。

「手芸だって？ はは、確かに手芸だな。これは旗の飾りだ。牛の毛をもらったので編んでいた。私はどうも昔から“手芸”が好きで、暇があればこうして手慰みに嗜んでいるのだ」

私は彼が“手芸”という言葉強調して、皮肉で答えたことに気付かなかった。そのため素直にこう言ってしまった。

「そうなのですか。でも、高い地位の方がそのようなご趣味をお持ちとはとても意外です」

これに城主は片目を細め、私を軽く睨んで言った。

「君はいったい何が言いたいんだ？」

そこで私はやっと、自分が失礼なことを口にしていただけだと気が付いた。この時の私の言葉は“有名な武将のくせに女々しい趣味にかまけて無駄に時を費やしている”と受け取られても仕方なかったのだ。慌てて頭を下げた。

「申し訳ありません！ 決して、批判の意味では……」

すると城主は怒るどころか、可笑しくてたまらないとでも言うように喉の奥でくっくっ笑った。そして笑顔のまま言った。

「いいよ。面白いな。青年、名は何というんだ？」

血の気が引いた。まだ名乗ってさえいなかったのだった。初対面の人に話しかけるのに姓名を告げないとは最大無礼。重ね重ねの無礼に私は恐縮しながら答えた。

「諸葛、亮と申します。字は孔明あざなです」

城主は戸惑ったように聞き返してきた。

「えっ。ショカ…何だって？ めずらしい姓でよく分からなかった。字は何と言ったか？」

漢で二文字の姓はめずらしい。“諸葛”は故郷では知られた名家だったが、漢の全土には知れ渡っていなかった。このため初対面でなかなか聞き取ってもらえず、私は自己紹介のたび同じ反応を受けていた。慣れたもので再び姓から名乗ろうとしたが、城主はそれを遮って言った。

「まあ、亮くんでいいよな。それで、亮くん、私に何の用だ？」

初対面の人にいきなり下の名を呼ばれ驚いた〔※13〕。この人は物凄く型破りな人なのだろうか、と思った。

「実は、あなたと話がしてみたかったです」

正直に告げると城主は声を立てて笑い、重ねて聞いてきた。

「話？ 何の話だ」

私は困り果てた。ただ城主と話がしたいと思っただけで、その内容までは考えていなかったからだ。

昨今の世間で話題となっている論点は今日すでに出尽くしていた。自分が今日この場で出された以上の話を、この人に向かってできるはずがない。あれこれ考え話題に迷っているうちに時間が過ぎていく。城主だけではなく、いつの間にか周りに集まって来ていた家臣たちまで私に注目していた。年上の武将たちから視線を浴び、焦った私はつい常識的な意見を持ち出してしまった。

「劉將軍、あなたはここ荊州を統治する劉鎮南（劉表）と曹操を比べ、どちらが兵法で優ると思われますか。また、ご自身はいかがですか」

城主は顔色を変えずに答えた。

「当然、兵法では曹操が上だろうな」

「兵法では曹操に敵わないと仰るのに、あなたの軍勢はわずか数千。これで曹操に対抗するのは無謀というものでしょう。もっと軍備を増強すべきではないでしょうか」

私を注視していた家臣たちは、この変わり者の青年が何を言うかと期待していたようだった。しかし私が当たり前のことを口にしたので失笑した。誰かが「それはそうだ」と呟き、あちこちからクスクスと抑えた笑い声が聞こえてきた。失敗した、と思った私は恥を覚えて顔を赤らめた。

ところが城主は少しも笑わなかった。そして真剣な表情でこう訊ねてきたのだ。

「うむ。実はその件については我々も困っているんだ。どうすれば良いだろうか？ 亮くんに何か良い考えはあるか」

意外な反応に私が戸惑っていると城主は促した。

「私は、亮くんの意見が聞きたいのだ。君の考えを話してみてくれ」

「は……はい！」

心の底から、驚いていた。城主は出自も分からない私のようなみすばらしい若者に、本気で意見を求めてくれたのだ。

「まずは兵士を増やすべきです。荊州の人口は少ないわけではないのですが、戸籍への登録を免れている者が多くいます。この不完全な戸籍の人数に基づいて兵を募るので、不公平を感じた民が反発を覚えて集まらないのです。民が求めているのは公平さです。民も皆、曹操の独裁支配に抵抗するつもりでいます。公平に兵を募り褒賞も明らかにすれば、すぐにでも多くの兵が將軍のもとへ集うでしょう……」

私は夢中で話を始めていた。それからは記憶がなく何を話したか忘れてしまったが、どういうわけか後から後から話が湧いてきた。不思議なことにこの人へ話をしていると、自分の最も奥深くの考えまでもが表に出てきてしまうのである。

この時、城主は私の話をただ聴いてくれただけではなかった。楽し気に目を輝かせな

から私に対等の議論を求めてきた。しかもそれは高位の人々によくありがちな見せかけの謙<sup>へりくだ</sup>った態度とはまるで違っていた。彼は心から自分が私と対等の立場だと思っていたのだった。そのため私は話しているうちに、一回り以上も年上の遥かに高い地位にあるこの人が、近所に住む知人であるような錯覚に陥っていた。あるいは十年来の、気心が知れた友人のように錯覚した。

気が付くと、私は城主の家臣たちまで交え話をしていた。時に楽しい笑い声が弾け、時には皆が真剣に私の話へ聞き入り、意見も飛び交って場は大変に盛り上がった。

この状況に気付いたとたん恐ろしくなった。

“なんという、はしたないことを！ 歴戦の偉大な武将たちと、まるで友人のように話し込んでしまうとは……”

冷水を浴びたように我に返った私は慌てて城主と彼の家臣たちへ頭を下げた。

「申し訳ありません！ 分をわきまえず、長時間お邪魔してしまいまして」

すると城主も家臣たちも驚いて辺りを見回した。その場にいた誰もが気付かなかったことだが、外は日が暮れ、室内には灯りが灯されていたのだった。

城主はまるで夢から覚めたように呟いた。

「あ、もう夕刻か。気が付かなかった」

家臣たちも口々に言った。

「なんだか、ずいぶん話し込んでしまったなあ」

「あまり面白い若造なんで、時を忘れてしまったよ」

私は顔から火が吹き出るような想いで、拱手の礼<sup>こうしゅ</sup>をとりながら言った。

「本日は私のような者のお相手をしていただき、ありがとうございました。直接に声をかけるだけではなく、このように長い時間お邪魔してしまいまして、何とお詫び申し上げたら良いか分かりません。度重なる無礼、どうかお許してください」

城主や家臣たちは笑った。城主は言った。

「なに、全然かまわないよ。無礼だなんて少しも思っていない。君のような若者だったらいつでも大歓迎だ。ところで亮くんの家はここから遠いのか？ もう遅いから泊まっていったらどうだ」

もったいない申し出に私は驚いた。そのまま食客として留まることになりそうな雰囲気だ。

「とんでもない。城内の宿に泊まるつもりですし、宿がなれば夜中でも歩けますから帰ります」

「そうか。では誰かに宿まで送らせよう。おい、誰か馬を出せ。この青年を宿まで送ってやってくれ！」

城主が声を張り上げたので私は慌てて断った。

「本当に、本当に結構です。一人で歩けますから」

すると城主はようやく引き下がった。厚意<sup>むげ</sup>を無下にしたなどと怒る様子もない。

「そうか？ だったら気を付けて帰ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

私は急いで退室しようとしたが、ふとあることが頭に浮かび立ち止まった。そして城主に向かい、こう言った。

「最後にもう一つだけ、お伺いしてもよろしいですか？」

城主は気持ち良く答えた。

「いいよ。なに？」

「……あなたは、普段、そのお立場にいて何をお考えなのでしょうか？」

この質問に家臣たちは驚いていた。解釈によっては嫌味にも聞こえる。目上の人に対してする質問ではなかった。さすがの城主もこれには怒り出すに違いないと思い、覚悟を決めた。

しかし城主は少しも怒ることはなかった。それどころか、ふっと真剣な表情になりこう答えたのだ。

「泣いている、大勢の女のひと、子供たちのことだよ」

衝撃で目眩がした。なんということだろう。それは私が長い間、高い地位にいる人々へ求め続けてきた言葉だったのだ。

胸の最も深い部分に仕舞い込んでいた、人としての根源的な願いが騒いだ。たとえようのない切なさが湧き、強く強く私の心を締め付けた。私はこの時ひたすら、このような人が地上に存在していたことを天に感謝した。もし許されることならば私はこの場で幼子のように泣き出していたことだろう。

思わず、私は劉玄德皇叔に対して深々と頭を下げた。そして一言、言った。

「ありがとうございます……」

城主は始め不思議そうにしていたが、何も聞かず、ただ「うん」と答えた。この時、城主は私の気持ちが分かっていたのだろう。

私は今にも涙がこぼれ落ちそうになるのを必死で堪え、顔を上げて言った。

「私はあなたのような方を知ることができ、本当に幸福です。それだけで、私はもう人生に対して何一つ求めることはありません。これから先、私が庶民として生きていくなかで、あなたの存在は希望の光となるはずですよ」

城主は私の言葉を繰り返すように、茫然と呟いた。

「……庶民」

「はい。これからずっと、私は庶民としてあなた方のことを応援していくつもりです」

すると背後にいた家臣の一人、関羽<sup>かんう</sup>將軍が私に声をかけた。

「ちょっと待ちなさい。亮氏は、我が君の食客となるためここへ来たのではないのかね？」

私は正直に答えた。

「はい。申し訳ありません。実はこの場には、舅を納得させるために参りました。仕官を断り続け、庶民として生きる決意でいた私に、舅が最後の機会として面談に参加することを求めたのです。約束は果たしましたから、この先は私の思う通りの人生を選ぶことができます。今後は生涯を庶民として暮らしていくつもりです」

その場にいた人々は全員唾然として目をしばたかせた。理解が追い付かないらしい。仕えるつもりもないのに食客希望の面談に参加するなど、普通の人ではあり得ない行動だ。いくら説明しても理解してもらえないと分かっていたので、私もそれ以上は説明を

しなかった。

ただ一人城主だけが納得したように呟いた。

「そうか。そうだったのか……」

私は自分が余計なことまで話したことに気づき、また頭を下げた。

「申し訳ありません。失礼なことばかり言ってしまいまして。では私はこれで帰ります。

今日はありがとうございました」

そう告げて今度こそ広間を出て行こうとした。その時、

「亮くん」

と呼び止められた。何だろうと思って振り向くと、城主を始めその場にいた全員がこちらを見ていた。

「また、ここへ来てくれよな」

城主が言うと家臣たちも口々に言った。

「そうだ。いつでも、気軽に来ていいんだぜ」

「遊びに来るつもりで、来てくれていいよ」

私はこの温かい言葉に心から感動した。そして「ありがとうございます」と答えた。だが二度と来ることはないと思っていた。遊びに来るなどとんでもない、庶民の分際でそのようなことができるはずがないのである。

彼らとはもう二度と会うこともないだろう。しかし私はこの出来事を、ずっと心に抱いていこうと思った。あのような人々が高い地位にいるという事実だけで、私は希望を持って生きていくことができるのだ。

私はその日の出来事を誰にも話さなかった。  
かの劉皇叔<sup>りゅうこうしゆく</sup>へ自分から話しかけ、家臣たちも巻き込み夕刻まで話し込むなどという無礼行為が親族の耳に入ればまた大騒ぎとなる。

舅には「やはり駄目だった」と報告した。すると舅は納得したのか怒ることはなかった。そして約束していたため、それ以降は何も言って来なかった。婚姻関係もかろうじてそのままとされた。

こうして私は自由な生活を手に入れた。死ぬまで庶民として思索生活を続けていくことを、ついに許されたのである。

それからしばらく親族からの解放感と、将来の生き方が定まった安定感で充足した日々を送っていた。この先誰にも邪魔されることなく静かな暮らしを続けていけるのだと思うと、このうえない幸せを感じることができた。

そんなある日のことだった。

私が散歩から帰って来ると我が家の前に人だかりが出来ていた。均の身に何か悪いことでも起きたのかと思い、慌てて駆けて行った。するといきなりその場にいた近隣の人々に囲まれてしまった。

彼らは笑顔で、口々に言った。

「おめでとう！」

「すごいじゃないか！」

状況が飲み込めずにいると、家の中から均が飛び出して来て叫んだ。

「兄さん！　すごいよ」

「均。これはいったい、どうしたんだ？」

私の質問にも均は興奮した面持ちで叫ぶだけだった。

「どうしたもこうしたもない！　とにかくすごいよ！」

「全然分からないよ。分かるように説明してくれ」

均は気持ちを落ち着けるように深く息を吸い、ようやく話を始めた。

「……兄さん、この間、劉皇叔と話をしたんだってね？」

私は驚いて一瞬答えに迷った。均もそのことは知らないはずだ。

「まあ、確かにそうだが……。でも、どうしてそのことを知っているんだ？」

すると均は何故か勝ち誇ったように言った。

「実は今日、うちに使者が来たんだよ。誰からの使いだと思う？　兄さんが話をした相手だ。つまり、あの、劉皇叔からの使者だよ！！」



周囲の人々から歓声が沸いた。一人状況を飲み込めない私は、歓声が静まるのを待って均へ訊いた。

「それで。何故、樊城はんじょうからの使者がうちに来たんか？」

均はその質問を待っていました、という顔をした。

「皇叔が、兄さんを迎えたいと言っていることを伝えに来たんかよ」

「なんだって」

「しかも、食客や新入りの待遇ではない。いきなり側近の相談役として、最高の待遇で迎えたいと仰っているんだ」

周囲の人々はほうっとため息をつき、うっとりした顔で私を眺めた。私はしばらく声も出なかった。

「……嘘、だろう？」

「嘘ではないさ。使いの人は皇叔の印を持っていたのだから」

皆は私の顔を食い入るように見つめ、私の答えを待っていた。お祝いの言葉を一齐に浴びせるために。しかし私はこう言った。

「断る」

均も里の人々も啞然とした。しばらくして気を取り直した均が呟いた。

「なん……だって？」

「断る、と言っているのだ。当然だろう」

「何を言っているんだ、兄さん。気でも狂ったか」

「私は正常だ。正常だから断るのだ。気が触れているのは、劉皇叔のほうだ。私のような経験もない若造を側近にしたいなどと、おかしくなったとしか思えない」

均の顔が青ざめていく。

「……そんな……」

「とにかく、断る。だいたい私はもう庶民として野に生きると決めたんだ。その決意を今さら、変えることなどできない」

私はそう言い残し、さっさと家の中へ入ってしまった。人々はあまりの意外な回答に言葉を失っていたようだった。しかしすぐに酷い騒ぎとなった。私はその騒ぎを家の中で聴いていたが、知ったことかと思って出て行かなかった。

翌日以降、毎日里の人々からの説得を受けた。だが私は気持ちを変えることはなかった。そればかりか、親族の耳に入るとやっかいだからその前に断っておこうと思い、さっさと断りの書簡を樊城へ出してしまったのだ。

均も里の人々も私を「どうかしている」と言って責めた。劉皇叔のような高名な人物に認められるのは稀なことだというのに、断ってしまうなど頭がおかしいと言うのだ。だが私は彼らに何と言われても気持ちを変えることはなかった。

もちろん城主に認められたことは嬉しかった。私は初めて会った時から、劉玄德皇叔げんとくを最も尊敬する人物と考えていた。だが、だからと言って彼に仕えることなどできなかった。相手が誰であろうと“出仕”するのはお断りだと考えていたからだ。

だいたい、城主は何か勘違いしておられる。経験もなく学も浅い私ごときを側近にし

たいと所望されるとは、おかしくなられたのではないか。自分には有名な武将の側近などどうい勤まらないし、もしそのようなことになれば足手まといになりかねない。遠くから健闘を祈っていたほうが彼のためだろうと思った。

しかしそれから一か月後のことである。

「ごめんください」

夕刻近く、表から呼ぶ声がして私は昼寝から叩き起こされた。

「誰だろう……」

そう眩きながら出て行った均が、すぐに血相を変えて戻って来た。

「兄さん。この間の使いの人が、また来ているよ」

「えっ。断ったはずなのに」

「でも来ているんだから顔を出しなよ。断るのなら自分で断ってくれ」

「分かったよ。今度こそきちんと断るさ」

そう言って私は手早く身なりを整え、表へ出て行った。しかしその使者の顔を見たたん、すうっと血の気が引いた。

「……劉將軍！」

「やあ。やっと会えたな」

あの日見た屈託のない笑顔を向け、劉皇叔が立っている。眩暈を覚えた。私の後ろで会話を聞いていた均も顔面を蒼白にした。

「將軍、ご本人でらしたんですか……」

声を震わせながら眩く均を見て、城主は楽し気にからから笑った。

「弟くん。この間は、嘘ついてごめん。きっと騒ぎになると思ったから名乗らなかったんだよ」

私たちは彼の配慮に感謝した。確かにこの間は皇叔から使者が来たというだけで騒ぎとなったのだから、本人が来たと知れたら大騒ぎでは済まなかっただろう。連日宴会が催され、しばらく静かに眠ることも許されなかったはずだ。

それにしても……、まさかまさか、皇叔自らこのようなあばら家へ来られるとは。

私と均は混乱に陥っていた。なにしろこれはあまりにも現代（当時）の常識からはずれる行為であったからだ。その昔、伝説の君子たちは礼を尽くすため自ら賢者のもとへ足を運んだという。だがそれは伝説上の話であって、現代で実際に行う人がいるとは聞いたことがない。有名な学者に対してならまだあり得たことだが、私のような無名の若者に対して身をかがめ礼を尽くした君子は、古代でもいなかったはずだ。

驚きのあまり呆然とその場に立ち尽くしていた私たちへ、城主は事もなげに言った。

「とりあえず、立ち話も何だからお宅へ上がらせてもらえないかな？」

私たちは驚いて断ろうとした。

「そんな！ 私の家は見ての通りのあばら家です。とてもあなたのような貴賓をお上げするわけにはいきません」

すると城主は笑った。

「あばら家だって？ 十分に立派な家じゃないか。私が子供の頃は、これよりもっとみ

すばらしい家に住んでいたんだ」

そう言って城主は自分で勝手に中へ入ってしまった。私たちはただ、あっけにと取られ彼について行くしかなかった。

「いったい、どうなさったのですか。どうして、わざわざこのような所まで足を運ばれたのですか」

城主が腰を落ち着けると私は開口一番そう尋ねた。尋ねずにいられなかったのだ。

「どうしてだと。そんなもの決まっているだろう。来たかったからだ」

「来た、かった!？」

「そうだ」

私が驚いてまじまじと城主を見つめると、彼は言った。

「何かおかしいか？ 私は行きたい所には自分で行く」

「……はあ。なるほど」

そう返してはみたものの、まだ納得できていなかった。彼は何故こんな所に来たいと思ったのだろう。こんなあばら家に。

「しかし、将軍は何故、こんな所に来たいと思われたのですか」

私が素直に思ったことを口から出すと、ついに城主は笑い出し

「そんなにおかしいか。私が君に会いに来ることが」

と言った。

「探したんだぞ、君の家。あの時、ほら、姓を聞くのを忘れただろう。いやたしか聞いたんだが、めずらしい姓で覚えられなかったんだよ。君は名刺も持参していなかったしな。それで分かっていたのが“亮”という諱<sup>いみな</sup>だけだった。それだけで探すのは大変だったよ。あちこち尋ねまわっていたとき、ようやく君の友人が教えてくれた。知っているだろう、徐元直<sup>じょげんちよく</sup>だよ。彼は今、私のもとにいるのだが」

学友として長い付き合いのある元直だ。最近会っていなかったため皇叔へ出仕したとは知らなかった。

「私が亮という名の若者を探しまわっていると聞きつけ、“それは諸葛に違いない”と言って住処を教えてくれたのだ。——実を言うと以前から元直には君を推薦されていたらしいのだが、私は実際に会ってこの目で見た相手にしか興味がないものでな。聞いただけの人物名は耳に留まらないのだ、すまない。どうやら司馬徽先生からも何度か君を推薦されていたらしい。いやはや、元直には怒られたのなんの」

楽し気に笑いながら話す城主に私はあっけにと取られた。元直や水鏡先生が私を推薦してくれたとの話も意外で驚いたが、何より城主がそこまで必死で私を探したとの話に驚いていた。

呆然と聞いているだけの私の顔を、不意に城主は真直ぐに見据えしみじみ言った。

「本当に、また君に会えて良かった」

私はさらに当惑した。おそらく奇妙なものでも見るような目つきで彼を見ていたのだろう、笑われた。

「君に会いたいと思う者がいることが、それほど奇妙なことなのか？ だが決して奇妙

なことではないよ。なにしろ君は一度でも話をすれば、決して忘れられなくなる人物だからな」

私には不思議な言葉だった。たいていの場所で大人しく控えている自分が、他人へ強い印象を残すとは思えない。つい、そのままの疑問を口にした。

「そうでしょうか？ 私は他の人よりも印象が薄いほうだと思いますが」

すると城主は私を軽く睨んだ。

「どうやら君は、自分のことがまるで分っていないようだな」

それから城主は少し言葉を切り、私の目を見ながら話し始めた。

「面談の間中、君はずっと黙っていただろう。私の目にはそんな君こそが最も見込みのある人物として映ったんだ。ところが、だ。君は最後まで残ったね。その時点で私は君に失望してしまったのだよ。なんだ、この男も結局は自分を売り込みたいだけなのかと。だいたい一人で居残って自分を売り込もうとするなど、一番姑息な手だろう。そういう姑息な男が、私はこの世で最も嫌いなんだ」

私は何も答えず黙っていた。あの時、自分を売り込もうという気持ちなどなかったのだが、そんなことを説明しても仕方がない。

ところが城主は先を続けた。

「実際、最後まで居残って自分を売り込もうとする姑息な連中は多いんだ。私はそんな奴の話など聞いている暇はないから、すぐに立ち去ることにしている。そしてあの時も、いつもと同じように広間を出て行こうとした。しかし腰を上げようとした直前、私は君を見て驚いた。君の目が、姑息な連中のもとはまるで違っていたんだよ。さらによく見れば君の身体は小刻みに震えているではないか。私はその時、ようやくはっきり気付いたんだ。この男は自分を売り込もうとして残っているのではない。ただ私と話をしたいだけなのだ、とね」

私は驚いて声も出なかった。あの時この人は私の身体が震えていたことを、そして私の心の中までをも見抜いていたのか……。

「だから私は広間に残って君が話しかけてくる時を待つことにした。そうして待っていると、やがて君は私に話しかけてきた。私の臣下たちが武器に手をかけているのにもかまわずに、だ。それは冗談ではなく命がけの行為だったよ。つまり君は自分の命を捨ててまで私に話しかけてきたのさ。その時私は、心の底から悟ったのだ。この男は、本物だ、と」

私が黙っていると城主は独り言のように言った。

「君を試したのは悪かったと思う。私はあの時、君という男を知るために自分からは話しかけなかったのだ。しかしおかげで、私は君をすっかり知ることができたよ。君が本当の意味で才能のある男だということをな」

私はその言葉に仰天し、思わず反論してしまった。

「しかし私は自分に世俗で使える才能があるとは思えません。現に、あの時私は、発言でも他の人々に劣っていました」

城主は急に厳しい顔つきになった。

「この玄德を見くびるなよ、亮くん。私が発言ごときに左右される人間だと思うのか。私は言葉など聞いたことはない。ただ発言をしている者の目を見ているだけだ。ごさかし

い発言などで、私を騙せると思うのは大間違いだぞ」

私は言葉を失った。それは城主の言うことが事実だと、私自身も知っていたからだ。あの時城主は確かに人々の発言を少しも耳に入れず、話している者の目を見据えていただけなのである。

城主は首を少し横にかしげ、片目を細め、ちょうど私の顔を斜めから見る形で言った。「どうせ君は、私が君に出仕を求めたことも気まぐれか何かだと思っているのだろう。しかしそれは武将というものを甘く見た、浅はかな考えだ。武将というものは何十万人、いや何百万人という人間の命を肩に背負っているのだぞ。一時の気まぐれなどで人選のできる立場ではない。……いいか、君が才能のある人間だということは絶対に間違いないことだ。そして私は君のその才能に賭けているのだ」

私はこの瞬間ひやりとした。城主の目の中にあの時と同じ、冷たく真剣な光が宿っていたからだ。城主は目の中にその光をたたえながら、力強い声できっぱりとこう言った。

「単刀直入に言う。私は君が欲しい」

「……！」

「私は生まれて初めて切実に、人間を欲しいと思っている。君が必要だ」

あまりの真剣な言葉に圧倒され、私は声を出すこともできなかった。用意していた断りの台詞も全て吹き飛んでしまった。

城主は、ふと声の調子を変えてこう言った。

「君の書いた文を読ませてもらったよ。なかなか良く書けている。思想家として長く人々に尽くしたいという君の想い、自分には世俗の力がないことなどがよく伝わった」

それは私が書いた断りの文のことだった。

「だがな。君は少し、勘違いしているようだ。君は自分のことを何もできない、お役に立てないと言うが、そんなことはこちらは百も承知だ。君が何もできないのは当たり前だろう。いったい、君は自分が幾つだと思っているんだ。何かできると言うほうが間違っている」

彼はそう言ってから再び真直ぐに私の目を見た。

「私は君が欲しいと言っているのだ。ただそれだけだと言っている。君に何かして欲しいとは、ひと言も言っていないはずだ。私は、何か間違ったことを言っているだろうか？」

いいえ、と小さく返事をした。

「分かれば、それでいい。あとは私の言葉に対する君からの返事を待つだけだ。君が欲しい、と言った私の言葉にね。私はまた、後日ここへ来る。それまでよく考えていてくれ」

そう言って城主はさっと立ち上がった。

「もう帰ってしまわれるんですか？」

表で待っていた均が驚いて声をかけると、城主は

「ああ。世話になったな」

と言って、彼に向かって片手を軽く上げた。立ち止まって振り返り、

「そうそう。それから、あと一つだけ言うておくよ」

と言った。

「君は自分を知らなさすぎるね。“彼を知り己を知れば百戦殆うからず”と言うが、逆に言えばそれは“自分を知らない者は何をやっても駄目だ”という意味だ。君が自分のことに

気付かない限り、とうてい思想家にもなれないだろう」

その言葉に私は胸の痛みを覚えた。自分の弱い部分を突かれた気がした。

「では、また来るから」

そう言い残して城主は門外に待たせていた家臣とともに馬に乗って行ってしまった。

「兄さん」

城主の後ろ姿を眺めていた均が呟いた。

「劉皇叔って、すごく気さくで、いい人なんだね。憧れるなあ」

私は呑気な弟の言葉に何も答えることができず、坂道を降り遠ざかって行く城主の後ろ姿を見つめていた。

### 三

城主の残していったものはあまりに大きかった。強く固めたはずの私の決意は揺れた。しかし悩みに悩んだあげく、私はやはり彼のもとへ出仕することはできないという結論に達した。とにかくもう野で生きていくと決めた後なのだ。

私は決意を改め、再び彼が来る時を待った。断りの台詞を幾度も自分の中で繰り返して。

次に城主が私の家を訪れたのは翌年の春のことだった。

冬の間一人で鬱々と考え込んでいた私は、城主の顔を見るなりさっそく用意していた断りの台詞を告げた。彼と話しているうちに気が変わってしまったら困るため、始めにそれを伝えておいたのだ。

断りの言葉を聞いた城主は表情を動かさずに「そうか」と言った。

「それならそれで、いい。君がそう決意したのなら構わない」

城主があまりにも淡々とした口調で言うので少し拍子抜けしてしまった。もっと激しい抵抗があると思ったから冬の間ずっと断る練習をしていたのに、こうまで簡単に引き下がられると調子が狂う。

「申し訳ありません」

私が謝ると城主は

「謝ることはない。君が自分で決めたことなのだから、それでいい」

と静かに言った。

この間とは態度が違うので、私は思わず城主の顔をまじまじと見つめた。その硬い表情からは城主の考えていることまでは読み取れなかった。落胆しているのか、それとも本当にどうでもいいと思っているのか、私には分からなかった。

「それでは、これでもう会うことはないな」

城主がそう言った時は心の奥が痛んだ。だが私は気持ちを抑えて、笑った。

「はい。私は庶民として、いつまでもあなたを応援しています」

すると城主は、

「……そうか。ありがとう」

と言って笑った。それが少しの悔恨もない、さっぱりした笑顔であったので私は改めてこの人に感服してしまった。

帰り支度を始めた時、彼はふと思いついたように言った。

「そうだ。最後に、君から庶民としての意見を聞かせてもらおうかな」

「庶民としての意見ですか」

「そうだ。君は庶民として応援してくれるのだろう。だったら庶民としての意見を聞かせてほしい。私にとって、庶民の声ほどありがたいものはないんだ」

「ですが……」

私が戸惑っていると彼は笑って

「そんな、難しく考えなくていい。日頃思っていることでいいんだよ」

と言う。

「私が日頃思っていること……」

「そう。たとえば、君の夢でも何でもいい。聞かせてくれ」

夢。そう言われて私は思った。そうだ、この際だからこの人に自分の夢を話してみようか。もう二度と会うことはないのだし、他人に自分の夢を話すいい機会かもしれない。

「分かりました。ではお粗末ながら私の夢をお話しします。でもお時間は、大丈夫なのですか」

私が尋ねると城主はにこりと笑い、

「君のためになら時間はいくらでもあるよ」

と言って姿勢を正して座り直した。私はそれを聞き安心し、ゆっくりと言葉を探すように話し始めた。

「私は、光和四年の生まれです。漢朝が乱れ、人々が略奪と虐殺に怯え始めた頃でした。三つの年を数える頃には黄巾乱こうきんらんが起きています。ですから私は幼い頃より遠くの陰惨な話ばかり聞かされて育ちました。そのたびにどうしようもない悲しみに襲われ、激しく思ったものです。“このようなことがあってはいけない、どうにかしなければ”と」

城主は眉間にしわを寄せ、黙って私の話を聞いていた。彼は他でもない、その黄巾乱の鎮圧のため立ち上がり世に出た人だった。私が幼い頃から耳にしてきた戦いの中心で生きてこられた人物なのだ。私はそんな城主におこがましいことを承知で話を続けた。

「おそらく争いをなくすことなど不可能とお思いになることでしょう。しかし決して、不可能なことではないのです。全ての人々がこの世の中心の真実を手にすることができれば、争いは確実に消え失せます。しかし難しいのは人々が真実を手にすることです。この世の中心にある、永遠の世界へ目を向けさえすれば良いのに、欲に囚われている人にはそれができない……」

私は昂ぶり始めた気持ちを抑えるため息を吸い、先を続けた。

「私の字である孔明あざな こうめいは、朝を呼ぶ啓明けいめい（明けの明星）にちなんだもの。朝すなわち真実（明）をこの世で孔かなえたいという願いを込めた名です〔※14〕。私の夢は、“全ての人々が真実を得た世を地上で見る”ことなのです。そして私自身は、真実がこの世で実現するための突破口の一つになりたいと思っています。とは言えそれは何も、だいそれたことではありません。永遠の世界へ通じるあの壁に、ほんの小さな孔でも開けることができればそれで良いと思います。たとえば針の先ほどの小さな孔でも、数多く開ければ壁に大きな孔を開けることができる。少しの水滴でも長い間をかけて同じ場所へ落ちれば岩を砕きます。私はそんな針の孔の一つに、水滴の一つになりたいと思っています。私が



普通に庶民として生きていて、それで周りの数人が真実を感じてくれたならば私は突破口の一つになれると言えます。そして本当の意味での思想家になれるとも言えます。そのような生き方が、私の望む人生です」

私が話し終わると城主は目を閉じて何事かを考えていた。しばらく後、まるで独り言のように呟いた。

「なるほど。よく分かった。それが君の夢で、君の望む人生か」

そして深々とため息をつき、苦悩の声で言った。

「しかしその真実とやらをこの世の人々に知らせることは、今すぐにはできないことだろう。ならば今の現実はどうする？ 現にこの国で暴虐に苦しんでいる人々は？ 君は真実が争いをなくすと言う。私は思想の用語に詳しくはないが、君の言いたいことは分かる。もしも全ての人々が純粋な気持ちで生きたなら馬鹿げた争いはなくなるだろう、と私も思う。しかし現時点では、そのようなことは不可能だ。現にこの漢土は今にも凶暴な独裁者、曹操の手に堕ちようとしている。もしそうなれば圧制を受ける人々の苦しみは言語を絶するものとなるだろう。——私は君に、尋ねたい。今、この国の危機をどうすれば良い？ どうすれば民を独裁者の魔手から救うことができ、どうすれば安穏な日々をもたらすことができるのか……」

私は言葉を失った。現実にはこの国の上層で活躍している人物が、私のような若造へ心から真剣に国の行く末について尋ねてきたからだ。だが次の言葉を聞いた時、私は彼の本心を悟った。

「言ってくれ。私は、どうすれば良いのだ……？」

彼は決して、私に尋ねているのではなかった。ただ自分自身に尋ねているだけなのだった。そして私には、私だけが思うことを、何でも良いから答えて欲しいのだ。

私は気持ちを固め、答えた。

「幾度も言うようですが私は一介の庶民です。とてもとても、あなたのような一線で活躍する方に申し上げる言葉は持ちません。ですが個人的には、人々を平穏へ導く方法がたった一つだけあると思います」

すると城主は顔を上げた。私は彼の瞳を真直ぐに見据えて、言った。

「あなたが、王になることです。劉將軍」

さすがの城主もこの言葉には仰天した。

「なに」

「ですから、あなたが国家の頂点に立てば平和が訪れるのです。いえ現時点ではそれ以外に、人々を平穏へ導く方法は一切存在しないでしょう」

城主は言葉を失い、私の顔をまじまじと見ていた。しばらくしてようやくこう言った。

「君はどうかしている。そのようなことが、できるはずがないだろう」

私はすかさず、言った。

「いいえ。できます。と言うより、そうする他ないのです。漢の高祖（劉邦）は云いました、“劉姓の者以外が王となり漢土を治めることを禁ずる”と。將軍、あなたが今の世で劉姓にお生まれになったのは天の導き、民の招聘です。……私の申し上げることがお分かりになりませんか。本当に天命〔※ 15〕を受けるべき者は、国で最も弱い存在のことを本気で考えられる人です。つまり、泣いている女の人たちや子供たちのことを考え

られる人物です。そのような方が治める以外に、民を救い、国に安穩をもたらす方法は存在しないのです。そして私はこれまで生きてきたなかで、あなたの他にそのような人物を知りません。おそらく今の時代では、天命を受ける資格を持つ方はあなた一人しかいないでしょう。ですから私はあなたが漢を統治する以外に、人々を救う方法は存在しないと申し上げているのです」

城主はしばらく黙っていたが、やがて咳いた。

「君は、私のことをあまりに買い被り過ぎだ」

「いいえ。買い被ってなどおりません。あなたは間違いなく、王となりいずれは天子となる資格を有するお方です。華夏〔※ 16〕の頂点に立つべきお方です」

城主が答えられないため私は言葉を継いだ。

「現実的な方策にお迷いなら、僭越ながらこの庶民の考えを述べさせていただきます。素人考えですが聴いていただけると幸いです……。〔※ 17〕

曹操は袁紹と比べれば名声も軍勢も足下にも及ばない劣勢でした。そんな曹操が袁紹を破り強者となったのは、決して天運によるのではなく彼の狡猾な謀によります。つまり、天に逆らい権力を盗んだ盗賊に過ぎないのですが、その狡さを責める声だけでは無力。盗賊に良心は無いため責めても暴虐を止めない。したがって正攻法では敵いません。今や曹操は百万の軍勢を持ち、天子の名で諸侯へ号令しています。正面から戦うべき相手ではないでしょう。

いっぽう孫権は三代にわたり江東を支配しています。劉姓の王ではありませんが、長江に守られた領土は険しく、今のところ民も孫権へ服し、有能な臣下たちが補佐しています。ですから孫権は敵とすべき相手ではありません。彼と手を組むべきです。

そしてここ荊州ですが、北は漢水・沔水〔※ 18〕に守られ、経済の利益は南海〔※ 19〕にまで及びます。さらに東は呉へ西は巴蜀へ通じています。交易の中心であり、軍事拠点としても重要な地であるのに、今の領主〔※ 20〕では防衛しきれるとは思えません。この荊州に將軍が導かれたことも天命。天が荊州をあなたに与えているのです。あなたには受けるご意志はないのでしょうか。

続いて益州、蜀です。蜀は険しい山々という天然の要害に守られ、肥沃な土地が千里もあります。高祖もその蜀を本拠地として天下を統一されました。しかし益州の主である劉璋は暗愚で気が弱く、邪教の五斗米道〔※ 21〕教祖、張魯に北の領土を脅かされています。また経済も豊かで民の力も強いのに、民へ恩恵を及ぼさずに信頼を失っています。蜀の民は明君に統治されることを望んでいます。

劉將軍。あなたは高祖の末裔として天下に名が知れ渡っているだけではなく、信義に厚いそのご人格も知れ渡り、民の人望を集めています。さらに喉が渇いて水を求めるように人材を求める將軍のもとへは、これからも有能な武將や補佐たちが集まるでしょう。そして、あなたがもし荊州と益州を治めるならば必ず機会は訪れます。要害を固く守り、西と南の異民族を慰撫し、孫権と友好関係を結んで内政を整えてお待ちください。暴虐の限りを尽くす曹操は自ら権力を衰退させるはず。やがて朝廷は権力闘争で混乱に陥るでしょう。乱が起きたらその機会にすかさず荊州の兵を中原へ向かわせてください。同時にあなたご自身も益州の軍勢を率いて曹操討伐へ出陣するのです。

あなたを支援しない民がどこにいますでしょうか。漢全土の民はこぞって兵糧を整えあ

なたをお待ちするでしょう。

そして盗賊を追い出した暁には——あなたの天下統一は果たされ、漢王朝の復興も成し遂げられます」

私は長々と回りくどく言葉を変えて、「あなたが天命を受けるべき」と繰り返したのだった。未だ何も答えず当惑している城主の顔を、半ば睨みつけるように見て強く言い切った。

「あなたには力がある。私が先ほど申し上げた“真実の世界”をこの世で実現する力が。もしあなたが天命を受け、ご自身の手で国を治めるならば私の夢が叶います。ですから私は、あなたが頂点に立つ国家を求めるのです」

城主は大きく目を見開き私を見ていた。私は泣き出したい気持ちで、幼子のように訴えた。

「私はもし、この世界で真実が実現するのでしたら何を捧げてもいいと思っているのです。命など、幾つ捧げてもいい。それどころか、自分の魂を捧げてもいいと思っています。地上で真実が孔うなら、私はこの魂が消滅したって構わないんです……」

私はそこで、はっと息を飲んだ。城主の目にうっすらと涙のようなものが浮かんでいたからである。

彼は立ち上がり、私へ背を向けるようにして窓辺に立った。そして絞り出すような声でこう言った。

「悔やまれる。悔やまれてならない。君が私のもとに来ないとは」

声が出なかった。夢の中で聴く声のように彼の言葉が胸に響いた。

「やはり、君だった。私が探していたのは、君だったのだ」

私は驚いた。城主の涙があ那时的私の涙と全く同じだったからだ。つまり城主も、私と同じく探していた者に出会った喜びで涙を浮かべていたのである。

城主は私に背を向けたまま言った。

「私が欲しいのは、助言者や提案者ではない。伴に生きてくれる仲間だ。そして君は……、間違いなく私の仲間となる人間だ。君こそが、私と伴に生きてくれる唯一の伴侶だったのだ。しかし残念だ。君は、私と伴に生きてはくれないと言う。寂しいことだが私は今日ここで永久に君へ別れを告げなければならない」

しばらく私たちはお互いに黙ったままだった。どのような言葉も声にならなかった。

いつの間にか、日は西に沈みかけていた。黙ったまま窓辺に佇む城主の姿を、柔らかい春の夕日が暖かく照らし出している。少しだけ目を細めて遠くを眺める横顔が、しだいに濃く優しい赤で染められていく。斜め後ろからその姿を見ていた私は、彼の横顔にふと説明のつかない郷愁を覚えた。

「それでは……そろそろ、行かなくては」

不意に城主がそう呟いた。その声で現実に引き戻された。

彼は顔だけこちらへ振り返り、言った。

「今日はありがとう。いい話を、聞かせてもらった。それから……」

私の方へ向き直り、真直ぐに私を見て、

「君と会うことができ、本当に良かったと思う」

と言って笑った。

そのまるで泣いているかのような笑顔を見た瞬間、私は全身を貫く衝撃を感じた。

“いけない！ このまま、この人物を行かせてはいけない！”

圧倒的な量の心の方が、激しい衝動の波となって私の全身を揺さぶった。

“今すぐ、はっきりと言うんだ。自分はあるかと共に生きて！”

この時城主はすでに帰る支度を整え、戸口へ向かっていた。その背中を目にした瞬間、張り裂けてしまうのではないかと思うほど胸が激しく脈打った。顔が熱くなり、そして……。

「待ってください」

気付けば私は出て行こうとする城主の背中へ叫んでいた。

「……待ってください」

城主は驚いて振り返り、私の顔を穴のあくほど見つめた。

「行きます。私などで良ければ、あなたについて行きます。いえ、ぜひ、ついて行かせてください」

城主はまるで魂を抜かれた人のように呆然と突っ立っていた。しばらくして震える声で言った。

「……本当か」

私は大きく頷いた。

「それは、本当か！」

彼は大げさに手を広げて叫んだ。自分の感情をどのように表現すれば良いのか分からないようだった。彼は私に近付いてきて手を取り、

「よろしく頼む」

と、力を込めて言った。

この瞬間、“ああ、言ってしまった…”と思った。ついに私は口にしてしまったのだ。決して言うまいと固く心に決めた言葉、そして心の底から最も言いたかったその言葉を。

後悔は、なかった。先のことも全く考えていなかった。ただその時は、たとえようのない衝動に突き動かされてその言葉を口にただけのことだった。私は今でも何故あれほど重大な決心ができたのか分からない。とにかく私はその時、自分の人生を決定的に変えてしまう一言を口にただけのことだった。

この後は大変な騒ぎだった。私が劉將軍へ仕えることが決まると聞いて、親族たちは喜び連日祝いの宴を開いた。特に私をあの会合へ出席させた舅は驚き喜んだ。

里も大騒ぎとなった。貧しい近所の書生が、庶民にとって雲上人の“劉皇叔”へ仕えることになったのである。私は里のどこを歩いても人々に囲まれ、家の前にも人だかりができ少しも心が休まる時がなかった。

あれほど仲が良かった隣家の人々も急に態度を変えてしまった。まるでとても高い地位の人へ向かうように、懇懇な態度で接するようになったのだ。

ある日村長が皆の前でこう言い放った。

「お前たち、今まで少爺ぼっちゃんと親しくしてきただろうが。それがなんだい、急に態度を変えやがって。どこへ行こうと、亮少爺は亮少爺だ。それはいつまでも変わらねえぞ」

すると皆は涙ぐみながら口々に言った。

「でも、少爺は突然飛び立って雲の上へ行ってしまうのだから寂しいよ」

私も思わず涙した。

「何を言うんですか。私は私です、どんな状況になったって変わりません。だから皆さんにはいつまでも、“少爺”と呼んで欲しいです」

「でも……いつかここへ戻ってくるのかい？ もう一度会えるのかい？」

私は返答に困ったが正直に言った。

「お約束はできません。もしかしたら二度と、戻って来られないかもしれない。けれどいつか平穩が訪れたら必ずここに戻ります。そしてまた、皆で楽しくやりましょう」

里の人々は承知してくれた。そしていつか平穩な日々が戻ったら、必ず皆でお祝いをしようと誓い合ったのだった。

出仕の日、私は迎えに来た城主の臣下たちに伴われて庵を出た。馬に乗り、真直ぐな道のりを一路城を目指して進んだ。

この日馬に揺られて歩いたどこまでも真直ぐに伸びる一本道は、はっきりと一本に定まった私の心を表していた。さらにどこまでも迷うことのない道は、それから先の私の迷いのない人生を表していた。

この時私は人生のちょうど半分の年齢だった。私は残り半分の人生を、君主へ捧げ尽くすことになる。



注釈





※3 この時期「諸葛亮は管仲・楽毅かんちゅう がくぎに自らをなぞらえていた」との記録が正史にあるが、当小説では取り入れなかった。『梁父吟』を諸葛亮が唄っていたという正史記述も政治目的での創作と考えられるため、当然にカット。

巻末の解説参照。

※4 古代中国人の名は、姓+名+字あざなで構成されている。成人後の対等な関係では字を呼び合う。ここは友人を紹介している場面なので姓+字で表現した。

古代中国の名について詳細解説はこちら。<https://shoku1800.tokyo/2019/09/name/>

※5 水鏡先生らが各所で諸葛亮を売り込んでいたのは史実らしい。『襄陽記』他に記録あり。このため黄承彦が娘を嫁がせたとのこと。

※6 食客とは古代中国の習慣。君主が才能ある客人に食事を与え自宅に住ませる代わりに、種々の仕事を助けてもらう。斉の孟嘗君などは様々な才能を持つ食客を抱えたことで有名。

※7 後漢当時、正確な定義で“名士”と呼ばれる地位の人々は存在しない。ここでは豪族や名家などを指す一般日本語として、「地元の有力者」というほどの曖昧なニュアンスで用いた。

※8 布衣ほいとは古代中国で、庶民が着る飾りのない単衣のこと。官位がないことも指す。例「臣本布衣…」『出師表』

※9 名刺は後漢時代から盛んに使われるようになった。細長い木札に姓名や字、階級、簡単な伝言などを記す。通常は訪問先が留守だった場合に、自分が訪問したことを知らせるため置いて帰った。今回の話のように初対面の相手へ名を覚えてもらうため持参することもあっただろう。

※10 劉備は前漢6代皇帝・景帝の子、中山靖王劉勝<sup>ちちゅうざんせいおう</sup>の末裔<sup>しょう</sup>。1960年代以降、劉備の血統の話を『演義』で創作されたフィクションであると印象操作する論が叫ばれた。現在日本でも「劉備は皇帝の血統だと詐称した。皇帝の地位を篡奪するための強欲な嘘だ、犯罪だ」との説が大声で宣伝されている。しかし劉備の血統の話は正史にも記載がある史実である。劉備が許昌にいた時、献帝が系譜を調べ確かに劉備の言う通りだと証した。

詳細 <https://shoku1800.tokyo/2022/11/post-7623/>

※11 今上とは、現在の皇帝のこと。ここでは献帝を指す。

※12 皇叔とは皇帝の叔父のこと。

※13 古代中国では、成人男性の下の名である“諱”を呼ぶことは失礼にあたるとして避ける。年上であっても同様に、親族や幼馴染み以外は名を呼ばない。親しい者同士、名を呼び合うのを避けるために字があった。

※14 “明”は日と月の光のことで、世を照らす真実を象徴的に表す。“孔”という漢字は燕の子を表しており、本義では「願いが実現する、かなう」の意味を持つ。そこから転じて「目的を達成するために通す孔」の意で使われるようになった。

※15 古代で「天命」とは、天から降される統治代行の命令のこと。「天命」を受け神々の代行として天下を治めることになるのが「天子」で、つまり王や皇帝を指す。

※ 16 華夏とは中華の上級な呼び方。

※ 17 以下、括弧の終了までは『正史』本文から引用した（分かりやすくするための超訳あり）。諸葛亮が劉備へ提言したとされるこの計略は、一般に「天下三分の計」と呼ばれる。またこの時の対話は「隆中対」という。

※ 18 漢水は荊州（現在の湖北省）の北を流れる川。沔水はその上流。

※ 19 南海は現在の広東省を含む広い地域。

※ 20 荊州の当時の領主、劉表のこと。

※ 21 五斗米道は道教系の新興宗教。蜀の成都付近で興る。祈祷で病を治すとしたことから流行した。黄巾賊と同じく信者には山賊や流民の類が多かった。漢中で宗教王国を築き領土を侵して暴れたため、益州民を悩ませていた。



## 解説



## 解説を付けることについて

今回から巻末に解説を付けることにしました。

史実をもとに描いている『我傍に立つ【諸葛孔明自伝風】』は、現代日本ではなじみのない用語が多く使われています。

なるべく各ページごとに後書きで解説するようにしていますが、なかには短文で説明しきれないこともあります。ここではそのような長文でしか書けない話を掲載しています。

## 史実の曹操ってどんな人だった？

現代では曹操を「正義の人」と宣伝する声が大きいため、『我傍に立つ』で描く史実の世界観が伝わりづらいだろうと思います。

そこでこのページでは、**あまり知られていない史実の曹操**についてご説明しておきます。

### ■現代の曹操像は史実を180度反転した“美しい曹操”

まず基本的な話から。

マンガなどで描かれる「八頭身美形、民想いの高潔な人・正義の人」である曹操は**史実を180度正反対にひっくり返した完全に嘘の人物像**です。

驚かれるでしょうが、現代の歴史学者などもこの180度反転させた“ウソ（嘘）曹操”を史実だと偽って宣伝しています。YouTuberの話や、ここ30年ほどの間に出版された三国志解説本はだいたいウソですから、どうか信じないください。

何故こんな歴史改変プロパガンダが行われているのか？ という背景の話は政治思想がらみであり、非常にややこしいのでここでは控えます。  
興味ある方はこちらの min.t まとめをお読みください。

<https://min.togetter.com/6 qDMPgn>

または筆者ブログ→（タグ）三国志ジャンルの犯罪  
分かりやすく書いた記事はこちら。

<https://shoku1800.tokyo/2018/12/post-1442/>

史実の人物像を知るためには『正史』と呼ばれる記録書を読まなければなりません。

しかし退屈な『正史』を読むのはなかなか難しいことだと思います。

ここで簡単に史実をご紹介します。



## ■容姿醜く、出自にもコンプレックスあり。反動でイキっていた少年時代

吉川英治を始めとする日本の『三国志』フィクションでは、八頭身の超絶美形な、織田信長に似たヒーローとして描かれる曹操。

美形の英雄だと信じて曹操へ恋した人も多いでしょう。

しかし史実の曹操は、“容姿が非常に醜かった”と記録されています。

もちろん写真が残っていないので現実どんな容姿だったかははっきりと分からないのですが、「歪んだ顔で細い目をしていた」そうです。

曹操自身も容姿に劣等感を持っており、使者と会うときには常に立派な容姿の家臣を代役として立てていたそうです。

曹操信者たち（カルト的な曹操ファンのこと）はこの記録を真っ向から否定し、「我が曹操様を憎む敵対者による捏造だ！！」と大声で叫んでいるのですが、幾つもの記録書に同じようなことが書かれているので曹操の容姿が醜かったことは事実だと考えて良さそうです。

歴史学は宗教ではありません。自分の崇拝する神に合わない史実があるからといって、アクロバットな作り話で否定しまくるこのような恥ずかしいファンにならないようにしましょう。

ちなみに現代中国で曹操の墓が調査されたとき、遺骨から彼の身長は154～5センチだったと判明しました。これは寒冷期の三国時代当時としても低いほうです。

何故「曹操は低身長でブサイクだった」という事実が大事かと言うと、その容姿が彼の人格形成に深く関わっていたと考えられるからです。

記録によれば、曹操は容姿の醜さとともに、当時の嫌われものだった宦官かんがんの孫という負い目も持っていました。しかも父親は養子で、高位の祖父と血の繋がりはありません。そんな容姿と出身へのコンプレックスの反動か、若い頃はイキがっていたようです。

正史本文にもこう書かれています。

「曹操は子供のころから他人を騙して操る能力に長け、イキがって遊びほうけており、学問には見向きもしなかった」

また幼い頃のあだ名はなんと「嘘つきちゃん（阿瞞<sup>あまん</sup>）」。

家族や友人にも嘘ばかりついていた子供で、父親は困っていたとか。これは現代、精神医学上のサイコパスの定義に当てはまります。後の自己中心的で残虐行為を好んだ生き方と合致します。

詳細『曹操はサイコパスだった！ 現代の脳科学・精神医学で裏付けられる人格障がい』  
<https://shoku1800.tokyo/2021/06/post-3395/>

嘘つきでイキった自己中心の人が嫌われるのは現代と同じ。

当然のことですが曹操は友達が少なく、彼を有望だと認める人はほとんどいませんでした。

しかし人物鑑定で有名だった橋玄<sup>きょうげん</sup>という人のもとへ曹操が押しかけ鑑定してもらったところ、

「君は治世の能臣、乱世の姦雄<sup>かんゆう</sup>だ」

と告げられ曹操は大変喜んだそうです。

【余談】この橋玄の人物鑑定は、曹操信者たちによって「その時代で最も有名だった鑑定士が曹操様に心酔し激賞した（だから曹操様は若い頃から誰もが認める有能な人格者だった!）」と主張されているのですが、史実に書かれている話は違います。

史書によれば、曹操は鑑定してもらいたくて橋玄のもとへ足しげく通っていたが、橋玄は嫌がって鑑定しようとしなかった。ところが曹操があまりしつこく通うので、仕方なく上記の言葉を告げた。…とのこと。つまり鑑定を強要したという話になります。橋玄はストーカーのように通って来る曹操が疎ましく、またその強情さに恐怖も感じ、少し言葉を濁しながら評価したようです。

姦雄（奸雄とも書かれる）とは人を騙してのし上がる悪党という意味なのですが、曹操は「お前は優秀だ」と言われたと勘違いしたのでしょうか？

誰も自分を評価してくれないというコンプレックスがあったためにこの鑑定へ飛びついてしまったのだとも考えられます。

ともかく、この時期のコンプレックスと人物鑑定がその後の曹操の人生を決定づけたと言えるでしょう。

## ■皇帝を傀儡として朝廷を専横、肅清と虐殺ぞんまいの日々

曹操を美化したマンガ『蒼天航路』などで彼は、朝廷を専横した董卓を暗殺しようとした正義のヒーローとして描かれています。

忠臣から依頼されて董卓を暗殺しようとしたことは史実なのですが、曹操自身が正義のために依頼を受けたとは考えづらいでしょう。

曹操は漢王朝の腐敗の原因となっていた宦官を征伐しようと持ち掛けられたとき、「悪は必要だ」と断っています。

また『演義』など古典フィクションでも有名な言葉、  
「俺は他人を裏切るが、他人が俺を裏切ることは許さない」  
は実際に彼の発言として史書に記録されています。

この発言からも分かる通り、彼の行動原理はすべて一環して「自分のため」でしかないのであり、民のために悪を誅殺するようなタイプの人物では全くありません。「曹操は民を救おうとした正義のヒーロー」との物語は100%ウソの捏造です。

現に董卓が呂布に殺された後は、曹操自らが朝廷に乗り込み専横者となっています。しかも董卓が可愛く思えるほどの暴虐の限りを尽くしています。

少年だった<sup>けんてい</sup>献帝を傀儡とした曹操は、まず献帝の忠臣たちを軒並み殺してしまいました。中国共産党も真っ青の大肅清です。

ついでにこの時、曹操は過去に自分をバカにした相手なども追いかけて殺しました。権力を手にしたとたん、私怨での虐殺パーティをお愉しみになったわけですね。

後に皇后も、皇帝の実子も、自分に反抗的だから・独裁に邪魔だからという理由で殺しています。

大肅清で朝廷を牛耳った後には、漢の全土へ向け、自分の独裁統治に従わない相手を潰すため軍隊を派遣しました。

たとえば呂布や劉備、袁紹などに対してです。

しかしこれらの戦闘は凄惨なもので、すでに降伏している捕虜全員を生き埋めにしたり鼻を削いで殺すなどの残虐行為をしたと記録されています。

記録：

「諸書にすべて、公（曹操）が穴埋めにした袁紹の軍勢は八万だったとか、あるいは七万だとかいっている。」

また曹操は民間人を虐殺して歩きました。曹操を持ち上げるために書かれた正史ですら

「曹操軍が通り過ぎたところはどこでも多くの住民が虐殺された。」

と書いています。

詳細な解説もいないほど、当時の中華では曹操の虐殺行脚が有名だったのです。

当小説の冒頭で描いている虐殺後の光景は、曹操の虐殺行脚のなかで最も有名な“**徐州住民虐殺**”です。

それは曹操の父親が徐州で殺害されたことの復讐として、徐州住民を皆殺しにしようとした中華史最悪の大ジェノサイド事件。

曹操の歴史を反転しようとしている“曹操信者”たちは、ありとあらゆる屁理屈をもってこの住民ジェノサイドを否定しようとしています。

これから三国志を学ぶ皆さんは彼ら信者の態度を見習わないでください。

自分たちのイデオロギーに合わせて、集団で同じ説を大声で叫び史実を無理やり改変・抹消しようとする行為は、ナチスや共産勢力がしていることと同じ「歴史修正」の犯罪です。

人類に対する犯罪ですから読者様はどうか加担することのないよう願います。

記録はまず尊重すること。

解釈を変える場合は、**史書全体に矛盾しない筋の通った根拠**が必要です。

（ほんの一部分だけ切り取って都合良く歪んだ解釈をしないこと）

曹操の民間人ジェノサイドについては、あらゆる記録文で同様のことが書いてあります。どのような経緯にせよ、曹操が民間人を虐殺して歩いたことは消すことのできない歴史

上の事実です。

## ■当小説との関係

当小説、『我傍に立つ【諸葛孔明自伝風】』で主人公たちが対峙する相手（曹操）にはこのような背景があります。

曹操を美しい正義の人だと勘違いしている限り、当小説のストーリーは理解できないと思います。

少なくともここに書いた歴史事実だけは知っておいてください。

## ◆ Wikipedia からの引用

最後に Wikipedia 2023年6月9日版より、ここで解説した「曹操の虐殺」に関する箇所を引用しておきます。

以下はクリエイティブ・コモンズ（CC）3.0に基づいた、適法な引用文です。

引用元（指定日アーカイブ）

<https://web.archive.org/web/20230609213215/https://ja.wikipedia.org/wiki/曹操>

クリエイティブ・コモンズとは

<https://creativecommons.jp/licenses/>

<引用>

曹操、永寿元年（155年）- 建安25年1月23日（220年3月15日）は、後漢末期の武将・政治家。…略民間人虐殺や捕虜虐殺、廷臣の大量粛清、皇帝を傀儡化し漢王朝を専横した等の史実によって古来悪名が高く羅貫中の小説『三国志演義』でも敵役・悪役として設定されてきた。

近現代では魯迅・毛沢東ら共産主義者により曹操称揚が提唱され、文化大革命後においては中国共産党の指導により歴史評価の修正が推進されている。日本でも吉川英治『三国志』、李學仁・王欣太『蒼天航路』等の創作作品が容姿端麗な正義の人として描き、曹

操の美化称揚に貢献した。後に渡邊義浩等を代表とする歴史学者も曹操称揚の主張を展開し、曹操を英雄視する見方を主流として宣伝している。

#### 〔曹操の外見〕

曹操の外見は正史本文（陳寿『三国志』）には書かれていない。野史には「形陋（『世説新語』容止篇）」「姿貌短小（劉孝標が注に引用する『魏氏春秋』）」とある。陵墓の発掘結果によれば、その身長は約155cm（中国之声《央広新聞》2009年12月27日）であった。また前出通りその際の分析によって、晩年の曹操は虫歯や歯周病で歯をほとんど失っていたことがわかっている。

#### 〔曹操の犯した虐殺、粛清〕

曹操は『三國演義』以前から沢山の残虐行為が歴史書に記載されている。

現代日本のネット空間では曹操の悪行を真摯に受け止めず、悪行の否認、疑問視、軽視、正当化、Whataboutism 的相対化、ニヒリズム的に開き直った言説が盛り上がりがちである。陳寿三国志を筆頭とした幅広い歴史書に書かれた悪行全体ではなく「曹操は偏った歴史書や演義で悪く言われている」という部分に焦点が当たりがちであり「曹操は不当に貶められている」という被害者意識が共有される傾向にある。

以下に曹操が犯した具体的殺戮について、正史三国志（陳寿三国志本文および裴松之注に引かれた史書）の記述を列挙する。

#### ・ 呂伯奢一家の殺害。

曹操が董卓から逃走した際に匿おうとしてくれた呂伯奢と、彼の家人を皆殺しにした。殺害に至った経緯については複数の記述が存在する。

「呂伯奢の息子が馬を盗もうとしたため正当防衛で殺害した（王沈『魏書』）」

「呂伯奢一家のもてなしを受けた後で、通報されたら困ると考え殺した（裴松之注『世語』）」

「呂伯奢の家人が食事の用意のために食器を並べていた音を武器の音と勘違いし、殺される前に殺した（孫盛『異同雑語』）」

#### ・ 攻略した城の破壊、住民虐殺。

曹操は父親が徐州で殺されたことを怨み、193年、194年の二度にわたり徐州を襲撃した。

「曹操の軍によって徐州では男女数十万人が坑殺され、泗水は投げ込まれた死体で堰き止められ流れが止まった。泗水より南の慮・睢陵・夏丘の諸県を攻取し、皆なこれを屠城した。鶏も犬もいなくなり、廃墟になった」とある。（范曄『後漢書』陶謙伝 『曹瞞伝』）

三国志武帝紀本文には「曹操軍が通り過ぎたところ多くの殺戮が行われた。」と犠牲者数には触れないものの各所の虐殺を一括した表現による記載がある。

三国志荀彧伝、三国志孫策伝注、三国志笮融伝、三国志諸葛瑾伝、後漢書陶謙伝等からも徐州虐殺の存在、虐殺による影響が分かるようになっている。尚、徐州崩壊の原因は飢餓によるもの、という記載は見当たらない。

上記徐州虐殺を筆頭に曹操軍は複数回に渡り「屠城」を行った。これは同時代で一番多い回数である。

太祖攻圍數月、屠之（三国志呂布伝）

屠彭城（三国志武帝紀）

徐州虐殺とは別件。呂布討伐時

曹操攻屠鄴城（後漢書孔融伝）

水攻めで城を破壊した他、袁氏の婦女を犯した、と記載あり

太祖征三郡烏丸、屠柳城（三国志公孫度伝）

淵與諸將攻興國、屠之（三国志武帝紀）

冬十月屠枹罕斬建（三国志武帝紀）

公攻屠之（三国志武帝紀）

仁屠宛斬音（三国志武帝紀）

反乱を起こした民を屠った。

曹瞞伝では反乱を起こした理由は圧政に耐えかねたため、とある。

・官渡の戦いで捕虜虐殺

官渡の戦いの戦後処理で捕虜を生き埋めにした。

餘衆偽降、盡坑之（『三国志袁紹伝』）

裴松之注には「諸書にすべて、公（曹操）が穴埋めにした袁紹の軍勢は八万ないし、七万だと書かれている。」と記されている。”諸書にすべて”とあることから、当時は誰もが知る事実であった。裴松之自身はこの数について疑問を投げかけている。

また戦時中のことであるが千余人の士卒を殺し、皆な鼻を削ぎ袁紹軍に誇示した（『曹瞞伝』）、と捕虜を殺害、暴力を加えた記述もある

・朝臣を大量に殺害

曹操が許に献帝を迎え権勢をふるうようになった頃の記録に、「宮廷の内外で曹操によって誅殺された者が多くいた」とあり、肅清された被害者の代表として議郎の趙彦の名が挙げられている。（『後漢書』伏皇后紀）。

・私怨で多数の人物を殺害

曹操は許で献帝を傀儡とし実権を得た後、かつて自分を批判した者など怨みがある人々を殺害した（孫盛『魏氏春秋』陳琳の檄文）。

辺讓は博学で曹操にも屈せず批判的な議論を続けたため、曹操の怒りを買って処刑された。（陳琳の檄文）尚、後漢書辺讓伝では辺讓は建安年間に亡くなった、とある。

袁忠は沛国の相だったときに曹操が法を犯したので罰しようとし、曹操の怨みを買った。袁忠は遠方の交州へ亡命したが、曹操は使者を派遣して士燮へ依頼し、袁忠と一族を皆殺しにした。（『曹瞞伝』）

かつて曹操が若い頃に侮って彼を見下した桓邵も、同じく身の危険を感じて交州へ亡命していたが曹操の差し金により一族皆殺しとされた。（『曹瞞伝』）



・建安5年（西暦200年）の大処刑事件。

車騎將軍の董承は獻帝の密勅を受け、曹操の暗殺計画を企てた（『三国志-先主伝』。しかし事前に発覚し、計画に関係した者は一族もろとも処刑された。このとき董承の娘は獻帝の妃で妊娠していたが、彼女も捕えられ殺害された。

・皇后とその一族を殺害。

皇后の伏寿は、もと屯騎校尉であった父親の伏完へ「獻帝は董承が殺されたので曹操を怨んでいる」旨の手紙を送っていた。しかし伏完は曹操排除を実行できないまま死んだ。この手紙が建安19年（214年）に発覚し、彼女は廃され殺された。兄弟ともども伏一族は処刑された（『三国志武帝紀』）

他の歴史書にはより詳細な記載がある。

曹操は華歆に命じて兵を使って宮中に押し入った。皇后は二重壁の中に隠れたが、壁は壊されて引きずり出された。ちょうどそのとき郗慮と会っていた獻帝は、髪を振り乱し裸足のまま連行されようとしている皇后が「陛下、またお会いできるでしょうか」と涙ながらに助けを求めたのに対し、「私でさえいつまで命があるかわからないのだ」と言って為す術なく眺めることしかできなかった。皇后はそのまま連れて行かれて殺され、彼女の一族も数百人が殺された（呉人『曹瞞伝』 後漢書伏皇后紀）

尚、伏寿と獻帝の間には子が二人いたが、この子供たちも殺されている（『三国志先主伝』 後漢書伏皇后紀）。

・孔子の子孫である孔融を殺害

博学な学者として名声が高かった孔融を疎んじた曹操は「孔融が呉の使者に対し朝廷を誹謗する発言をした」と罪を被せ、孔融の妻子とともに処刑した（『後漢書』孔融伝）。

現代日本では癩癩を起こした曹操ではなく孔融を処刑含めて冷笑する言説が盛んであるが劉基が孫権に諫言した逸話のように、当時から不当処刑として扱われていた。

・名医華佗を拷問の末に処刑

華佗は曹操の頭痛を治療していたが帰郷の念が募り、医書を取りに行くと言って故郷に戻り、その後は妻の病気を理由に二度と曹操の下に戻って来ようとしなかった。妻の病気が偽りと判明したので、これに曹操が怒り華佗を投獄し、荀彧の命乞いも聴かず、拷問の末に殺してしまう（『三国志華佗伝』）。

・崔琰の投獄と自害命令。

崔琰は優れた体格と威厳ある容姿をしていたため、曹操の代わりとして使者の応対をしていた（『世説新語』）

後に崔琰は丁儀の讒言で投獄されたが、囚人となっても立派に見えた（辞色撓まず）ため曹操に疎まれ自害を命じられた（『三国志崔琰伝』）

崔琰は人望があり、「曹操に嫌われ殺害された人物のなかで、崔琰は最もその死を惜しまれ、未だに冤罪で殺されたと信じられている」と陳寿が評している。

・楊脩の処刑。

楊脩は曹操が劉備との戦役中につぶやいた「鶏肋」という暗号を解いた人物だった。しかしその後に曹操が彼を処刑している。処刑の理由は諸説ある。

袁術の甥であったことから曹操に警戒されて処刑された説（『後漢書』）

曹操が嫌う曹植の味方をしたことで疎まれ処刑された説（『三国志曹植伝』、『典略』）

・優秀だった少年を危険視して殺害。

幼少時から名高かった周不疑を、曹操は始め息子の曹沖の側近にしようと考えていた。しかし曹沖が死亡した後、曹丕には扱いきれないだろうという理由で彼を危険視し殺した。享年 17 歳だった（『零陵先賢伝』）。

・愛人を撲殺。

曹操は昼寝をするときに寵愛している女性を傍にはべらせる習慣があった。あるとき「すぐに起こしてくれ」と言って女性の膝枕で寝込んだが、よく寝ていたために起こせなくなった女性があるまま寝かせていた。しばらくした後に自分で目を覚ました曹操は激怒して、この愛人を撲殺してしまった（『曹瞞伝』）。

・洛陽の北部尉時代、厳しい禁令をつくり僅かでも破った者へ極刑を下した。  
靈帝に寵愛されていた蹇碩の叔父も、禁令を破り夜間外出したために即座に捕えて撲殺した。都の人々は震え上がり曹操を憎んだが、追放する口実がなかったため彼を称揚し、頓丘県令に転出された（呉人『曹瞞伝』）。

・兵糧不足の責任を担当係へ押しつけ、処刑。  
敵の討伐に赴いた際、糧秣が不足してきたので困った曹操は担当係を呼んで「どうしたら良いか」と訊ねた。すると担当係は「枘を小さくすればどうにか食いつなげます」と答え、曹操はその通りにした。しかし兵士たちが枘が小さくなったことに気付き、「曹操は自分たちを騙している」との噂が流れると兵糧の担当係に罪をなすりつけ処刑し、「この男が枘を小さくして糧秣を盗んでいた」と布告して遺骸をさらした（『曹瞞伝』）。

・消火に加わった者こそ本当の賊であると主張し、全員を殺した。  
曹操は王必が死んだと聞くと激怒し、漢朝に仕える百官を鄴へ召し寄せ、消火に加わった者は左に、消火に加わらなかった者は右に集まらせた。人々は消火に加わった者は無罪となるに違いないと判断し、皆、左の方についた。曹操は「消火に加わらなかった者は反乱を援助したはずはないが、消火に加わった者こそ本当の賊である」と主張し、全員殺した（『山陽公載記』）。

・その他

膨大で書ききれないため殺された被害者をここにまとめる

侍中の臺崇、尚書の馮碩（後漢書獻帝紀）

琅邪王の劉熙（後漢書獻帝紀）

王模、周達（三国志陳羣伝）

婁圭

赤壁の敗走中に自軍兵士を踏み殺す（山陽公載記）

<引用終わり>

## 陳寿の嘘？ 管仲・楽毅と『梁父吟』

この小説では一般フィクションでも用いられることの多い

- ・諸葛亮は若い頃、管仲楽毅に自分をなぞらえていた
- ・『梁父吟』を口ずさんでいた

とのエピソードはカットしました。

カットした理由をここに解説いたします。

■諸葛亮は若い頃、管仲・楽毅に自分をなぞらえていた？ …それはないと思います

『正史』本文には確かに  
「若い頃の諸葛亮は管仲・楽毅に自分をなぞらえていた」  
とあります。

管仲は文官で最も評価の高い人物、楽毅は武官で最も評価の高い人物。つまり「文武の最高峰に自分をなぞらえていた」と言うのですが、私はこの記録に疑問を抱いています。

まず後年、諸葛亮自身が

「乱世にどうにか生き延びることだけを考えており、現在のように世間の人々に名を知られることなど全く望んでいなかった」（『出師表』）

と書いていることから、若い頃そのような自信のある発言をしていたとは考えにくいです。仮に何かの冗談で青年期には大言壮語を吐いていたのだとしても、管仲はともかく楽毅を挙げるのが不可解。

おそらくこの記録文は諸葛亮の葬式で後主劉禪が読んだ哀悼の詔、  
「ああ君は文武両道にたけ、世に絶する才能と誠実さを備えていた…」  
を投影した噂話。

陳寿が政治的な理由のない箇所で嘘を挿入したとは考えにくいので、記録文が書かれた時代にはすでに「諸葛亮は若い頃から管仲・楽毅を目指していた」との噂話が事実であるかのように語られていたのかもしれない。

(もっとも諸葛亮はマイペースで言葉足らずな性格ゆえに、当小説で描いたような大言壮語と曲解される場面は実際よくあったと思います)

■『梁父吟』を口ずさんでいた』は政治的な作り話です

同じく『正史』本文に

「諸葛亮は若い頃、『梁父吟』<sup>りょうほぎん</sup>を口ずさんでいた」  
との記述があります。

しかしこれは政治的な理由——当時の晋政府の要請で挿入された作り話の可能性が非常に高いです。

詳しくご説明いたします。

もともとは齊の宰相、晏嬰を唄ったとされる『梁父吟』。

ですが諸葛亮の作として伝わるこの唄には、後述の意味が隠されています。

<引用 『梁父吟』読み下し>

歩みて出ず齊城の門、遙かに望む蕩陰の里  
里中に三墳あり、累々として正しく相似たり  
問ふならく是れ誰が家の墓ぞ、田疆と古冶子なり  
力は能く南山を排し、文は能く地紀を絶つ  
一朝讒言を被れば、二桃もて三士を殺す  
誰かよくこの謀をなす、相国齊の晏子なり

現代日本語訳：古い時代の国の門を出て、遙かに歩くと、蕩陰の里がある。ここによく似た、三つの墓がある。これは田疆と古冶子（と公孫接）の墓である。彼らは文武に優れていたが、ある日二つの桃を取り合って死んだ。さてこの見事な計略を果たしたのは誰だろうか？ それこそ、かの齊国の名宰相、晏嬰さまである。

<引用終わり>

勘の良い方はここでピンと来るとと思いますが、この「争い合って滅びる三者」とは三国時代の魏・呉・蜀のことです。

以下に暗喩を解説して翻訳します。

「里中に三墳有り。累々として、正しく相似たり」  
——ここに三つの墓がある 三つとも同じような墓である  
「問ふならく、是れ誰が家の墓ぞ」  
——これは何の墓だろう  
「田疆と古冶子（と公孫接）なり」  
——蜀と呉（と魏）の墓である  
「力は能く南山を排し、文は能く地紀を絶つ」  
——三国とも強大な力で大陸を支配していたが  
「一朝讒言を被れば」  
——欲に目が眩んで  
「二桃もて三士を殺す」  
——領土を求め、争い合って滅んだ  
「誰か能く此の謀を為す」  
——誰がこの三国を滅ぼしたのか  
「相国斉の晏子なり」  
——偉大なる晋の祖、司馬炎である

若い頃の諸葛亮がこんな予言を唄っていたのでしょうか？  
そんなわけがありません。

もちろん晏嬰が二桃をもって三氏を争わせ滅ぼしたことは実際あったことですが、この唄が晋代の創作であることは「三者」と言いながら二人の名しか出てこないことで明示されています。晋朝は魏から政権を禅譲されたことになっていますので、三国のなかの魏を省く意味で二人の名しか出していないのです。

『蜀志』にこの唄のタイトルを挿入したのは晋から蜀・呉に対する侮辱であり、特に当時人気だったらしく諸葛亮を貶める目的で若い頃の彼に唄させたのでしょう。

陳寿は諸葛亮へ個人的な恨みがあったのでは？ と噂されていますが、確かにそう思われても仕方のない侮辱行為と言えます。

おそらく陳寿は晋政権のもとで言論コントロールを受けていたため、政治的な要求に従わざるを得なかったのではないかとも思います。

ただしこの明白な“政治的挿入文”があることで、陳寿の『正史』が晋政権におもねって書かれた歴史書であると証明されるでしょう。

つまり『正史』は、晋政府の前の魏について「都合の悪い話」が相当にカットされている史書であることが裏付けられるわけです。特に曹操について都合の悪い話は極力カットしていたと言えます。

（そのわり「曹操は若いころ嘘つきでイキっていた」とか「曹操の通り過ぎるところ多くの住民が虐殺された」と書いているのは陳寿による最大限の抵抗だったのでしょうか？ または当時の民間であまりにも有名過ぎる話だったので触れないわけにもいかず、一言だけ触れた感じか。「いちおう報道したよ」とのパフォーマンスですね。なんだか「報道しない自由」を振りかざす21世紀の大手メディアのような態度です）

#### ■陳寿は嘘つき歴史家？

このように陳寿は晋政権の言論コントロール下で、時に政治的な都合による史実カットや作り話も挿入しています。

政治的理由による作り話の挿入だけではなく、

「劉備は手が長く耳も大きかった（＝劉備は人助けのためにどこまでも手を延ばし、家臣たちの意見をよく聴く耳を持っていたという喩え）」

といった民間の噂話レベルのことも書きました。

「諸葛亮は若いころ管仲楽毅に自分をなぞらえていた」

という話も民間の噂話です。

『魏志倭人伝』にも相当におかしな嘘が書かれているようです。

それでも陳寿を「嘘つき歴史家」と断じて、『正史』の全てを否定するのは間違いです。



陳寿は大枠では嘘をつかず、政治的な捏造は最小限に留めた印象があります。  
後世の史家、たとえば裴松之のような人が補足で史料を加えれば足りるように計算していたのか。

この点、歴史を完全に破壊して反転させる目的で、根本の事実から書き変えてしまうナチスや中国共産党といった近代の「歴史捏造主義」とは大いに異なります。

歴史修正は人類に対する裏切りであり重大な犯罪です。  
陳寿のような僅かな歴史修正も本来なら許すべきではありませんが、近現代人の悪魔のごとき「歴史捏造主義」に比べれば可愛い過ちだったと言えるでしょう。

人間性において近現代人は、古代人より遥かに劣るようです。

## 劉備と諸葛亮が初めて会ったのは、樊城か新野か？

諸葛亮が初めて劉備と対面し会話したのは、一般のフィクションで描かれているように隆中の自宅ではなく、どこかの城の面接会場であったことは間違いありません。その後劉備が“三顧”で諸葛亮の自宅を訪問したわけです。

史書においては、『正史』本文ではなく裴松之の注に引かれた『魏略』および『九州春秋』にこの話が書かれています。長らく「異説」として否定されてきた話なので、他者のフィクションで描かれることはほぼありませんが。

記録文を引用しておきます。

<引用始まり>

劉備が樊城に駐屯していたのは、曹操がちょうど河北の平定を終えたときのことである。諸葛亮は曹操のつぎの目標が荊州であるのに、荊州牧の劉表は優柔不断で軍事面の知識もないことを知っていたので、襄陽の北にあった樊城へおもむき劉備に見参した。ところが、劉備は諸葛亮を知らなかったうえ、かれが若いのを見て、「食客の希望者だろう」くらいに思って、とくに言葉をかけることもしなかった。やがて時間がきてみなが引き取ったのに、亮はひとり黙然と居残っていた。劉備は劉備で、「この若造いったい何者だ」と思いながらも、声もかけずにいた。

備は生来、旗の飾りにする牛毛を編むのが好きだった。たまたまある人からボウ牛（ヤク）の尾を贈られたので、なぐさみに編んでいた。亮はそれを見ると、進み出ていった。

「名将の聞こえ高い將軍のこと、当然、遠大なお志をお持ちと思いましたが、なすこともなく旗飾りなどを編んでおられるとは、これは驚きました」

備はこれはただ者ではないと悟り、ぱっとそれを投げ捨てていった。

「なんと申す。わしは手なぐさみにやっていたまでじゃぞ」

すると亮がいった。

「將軍には、劉鎮南（劉表）と曹操を比べて、いずれが優るとお考えですか」

「どうてい曹操の敵ではないわ」

「では、將軍ご自身を曹操と比べてみられていかがですか」

「やはり、向こうが上だ」

「いまや曹操にかなう者はいないというのに、將軍の軍勢はわずか数千。これで曹操の軍勢に対抗しようというのは、あまりにも無謀というものではありませんか」

「わしもそれを憂えているのだ。いったいどうしたものだろう」

このように備が虚心坦懐に手のうちをさらけだしてみせたので、亮はいった。

「現在、荊州の人口は決して少ないわけではないのです。戸籍に載っている者が少ないのです。それで、その不完全な戸籍簿の人数にしたがって兵を徴発するので、民衆は喜ばないのです。劉鎮南に進言され、州内に命令を下し、まだ戸籍に載っていない者たちをすべて登記させ、そのうえで兵を徴発すれば軍勢を増強できるでしょう」

劉備はこの計に従って軍勢を増強することができた。このことがあって以来、備は亮が雄大な戦略構想を持っていることを知り、最高の賓客としてもてなすことにしたのである。

【『三国志英傑伝3（正史・蜀志）』徳間書店より「中国の思想」刊行委員会翻訳】

<引用終わり>

諸葛亮の内心の説明は全く違うと思いますが（真実は小説本文に書いた通り）、他人の視点から勝手な憶測を加えて書けばこんな記録になってしまうということでしょう。偏見強めな記録文ではあります。

いずれにしても、この通り記録文でも裏付けられたため「諸葛亮が劉備と初めて対面したのはどこかの城」だったことは事実と言って良いでしょう。

では、それはいつのことなのか。

引用した記録文には

「劉備が樊城に駐屯していたのは、曹操がちょうど河北の平定を終えたときのことである」

とありますね。

“曹操がちょうど河北の平定を終えたとき”とはいつのことかということ、厳密に定義するなら西暦で206年となります。ただしばらく曹操の支配に抵抗する人々が各所で反乱を起こしていましたので、記録文を書いた当時の人々の感覚では207年頃が「河北の平定が終わった」と思えたのでは。

だとすれば諸葛亮がどこかの城で劉備と会ったのは206年～207年頃と考えて良いでしょう。

諸葛亮は満年齢で25～26歳。だいたい出仕の時期と合っていますので間違いはないでしょう。

しかし一般フィクションで描かれている通り、207年当時の劉備は荊州領主・劉表から新野を与えられて本拠としていたはず。

人材を集めるための面談会を、新野ではなく樊城で催したのは何故…？

ちょっとその辺りが私にも謎で、今回この小説を執筆するにあたって地名設定に迷いました。

#### ■新野での面接会だったら孔明は行かなかったらう

改めて考察するため Google で地図を開いてみました。

計測したところ新野は襄陽から 60 キロほど離れています。

日本、首都圏で言えばだいたい東京都千代田区→神奈川県秦野市（鎌倉より先）あたりまでの距離。

と言うことは新野へ徒歩で行くのはハードルが高い… 徒歩に慣れた当時の人間なら歩けないことはありませんが、しっかり旅支度をしたうえで一泊しての“旅行”となりますね。

馬または馬車を借りて行くことも可能でしたが、畑仕事で生計を立てていた諸葛亮がそんな金を投じてまで行ったかな？ 親族が金を出すということもあり得るが、さすがにそれは断るはず。

私のイメージでは、——つまりこの小説の設定では、諸葛亮は当時「出仕する気がなかった」。だから現実に長年出仕せず畑仕事で暮らしていたわけなのですが、親族に強く言われて仕方なく劉備開催の面接会場へ行っています。

だとすれば小説の設定上も、遠い新野まで一泊旅行の歩き旅をするのは整合性がなくなるでしょう。そんな情熱をもって面接会に駆けつけるのはおかしい。

いっぽう樊城は当時、襄陽城と河を隔てた対岸にありました。今の地名だと襄陽市内になります。

ということは諸葛亮が当時住んでいた隆中からも徒歩で一日圏内。

だとすれば、樊城なら「親族に言われて仕方なく行った」としても不自然ではありません

んね。

結論として、劉備と諸葛亮の初対面の場は新野ではなく樊城とするほうが妥当と考えました。

( 史実としても当小説の設定上も )

#### ■劉備は何故、樊城で面接会を開いたのか？

裴松之注『異説』記録文は地名・時期ともに確かだということは分かりました。

では当時新野を本拠としていたはずの劉備が何故、樊城で面接会を開いたのでしょうか？

ここからは推測ですが、劉備は荊州領主・劉表のいる襄陽城を頻繁に訪れていたはず。その都度、劉備を襄陽城に泊まらせるのは難儀なので劉表は彼に樊城も与え、宿泊地としていたのでは。

劉備が樊城で面接会を開いた理由は、やはり新野だと遠くて襄陽から来る人が大変だからではないでしょうか。

当然ながら荊州で学がある高級人材は“首都”の襄陽に多く住んでいました。このため劉備がわざわざ樊城へ赴き、面接会を開いたのだらうなと思います。

もっとも当時の劉備は大変な人気だったため、新野でも募れば出仕希望者が殺到していたはずです。

むしろそのことが分かっていたからこそ、面接者の労を減らすために襄陽の近場で開催したのでしょう。途中の宿泊地も混雑してしまいますから。

現代人には想像しづらいことですが、当時人気者だった劉備が動くところ人が集まり混雑しました。途中の宿泊地ではトラブルも多く発生したでしょう。

そのようなことをなるべく避けるために樊城で面接会を催したのではと思います。劉備の気遣いを感じます。

近場で開催されたおかげで、世事に関して“やる気のない”青年だった諸葛亮も面接会場

へ行くことになりました。

面接会が新野でしか開催されていなかったら三国志の物語も存在しなかった、と言えるかもしれない。運命とは不思議なものです。

■ “城主”と呼ぶのは違和感ですが、ご容赦を

作品中の呼び方について補足です。

この小説内では出仕前の諸葛亮が劉備を「城主」と呼ぶ箇所があります。（地の文で）これは時代地域を定めない架空小説だった、旧『我傍に立つ』の呼び方をそのまま引き継いだものです。

当時の劉備は樊城に駐屯していたので、庶民からの呼び方で「樊城城主」は間違っていないかなと思いますが、一般の三国志フィクションに慣れた方は違和感を覚えるかと思います。

ちなみに正史本文でどう記録されているかというと、諸葛亮は当時の劉備を「將軍」と呼んでいます。

「將軍」…確かにその尊称が正しいのですが、日本語だと違う気がしませんか？「將軍」は日本語で最前線にて指揮する強い武将のイメージ。劉備のキャラクターと合いません。

そこで地の文では「城主」または「劉皇叔」と呼ぶことにし、会話文中では正史ママで「將軍」と呼ぶことにしました。

不自然に感じられるかもしれませんが、日本語小説の工夫としてご容赦ください。



---

我傍に立つ【実名版～諸葛孔明 自伝風】2

---

著 吉野圭

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---